

Japanese Institute of Landscape Architecture

# 学会広報

平成二十一年七月二十九日発行

第21巻・第1号

平成22年度全国大会案内—研究発表論文集の投稿申込について	1
造園夏期大学開催案内	8
シンポジウム案内	10
平成21年度日本造園学会北海道支部大会案内	11
〳    東北支部大会案内	12
〳    関東支部大会案内	13
〳    中部支部大会案内	14
〳    関西支部大会案内	16
〳    九州支部大会案内	18

平成20年度北海道支部大会研究・事例報告発表会抄録	19
〳    東北支部大会研究発表会抄録	21
〳    関東支部大会事例・研究発表会抄録	22
〳    中部支部大会研究発表・事例報告会抄録	29
〳    関西支部大会研究・事例発表会抄録	35
〳    九州支部大会研究・事例報告発表会抄録	42

〈編集〉(社)日本造園学会事務局

〒150-0041 東京都渋谷区神南1-20-11 造園会館6F  
TEL 03-5459-0515、FAX 03-5459-0516

## ■平成22年度ランドスケープ研究論文集（全国大会研究論文集）への投稿論文募集のお知らせ

平成22年度ランドスケープ研究論文集（全国大会研究論文集，ランドスケープ研究第73巻5号）の投稿に関して、下記のように決定いたしましたので、会員の皆様にお知らせいたします。ふるってご応募ください。

1. 申込期間：平成21年8月25日（火）14時～平成21年9月10日（木）14時  
（電子申し込みによる）
2. 投稿期限：平成21年9月24日（木）（必着・期日厳守）
3. 提出先：（社）日本造園学会事務局「論文集委員会」  
150-0041 東京都渋谷区神南1-20-11 造園会館6F  
電話03-5459-0515 FAX03-5459-0516
4. 大会の開催日・場所：平成22年5月下旬 名城大学予定

投稿及び電子申込に関する問い合わせは、

日本造園学会論文集委員会（幹事 入江teruaki@nodai.ac.jp）までお願いいたします。

## □ランドスケープ研究論文集に投稿される際のご注意（平成20年6月14日 改訂）

ランドスケープ研究論文集に論文を投稿される方は、投稿規定および執筆要領を熟読し、下記の事項に留意して投稿論文を作成して下さい。但し英文で投稿される方は、学会事務局まで投稿規定を請求して下さい。

### （1）投稿資格について（規定1.「投稿資格」）

投稿者（筆頭著者）の方が未会員の場合は、学会への入会手続きを行ってください。（社）日本造園学会ホームページ（<http://www.landscapearchitecture.or.jp/>）からも手続きが行えます。

### （2）重複投稿の禁止（規定2.「投稿条件」）

投稿規定に記されているとおり、投稿論文は未発表のものに限り、いわゆる他の学術雑誌等に投稿されたものを重複して投稿することは認められません。ただし、以下の要件にあてはまるものについては未発表扱いとします。

- ①日本造園学会支部大会で発表したもの
- ②研究会、国際会議、シンポジウムなどで梗概または資料として発表したもので審査を受けていないもの
- ③学位論文で、印刷・刊行する等の一般公表を行っていないもの
- ④行政、団体、公社公団、業界等からの委託研究・調査で、学術論文の体裁でなく成果報告書に掲載されたもの

なお、重複投稿等の疑義がある場合には、査読の段階において、別に定める基準によって判断するものとします。

### （3）使用する言語（規定4.「使用する言語」）

投稿原稿の作成にあたって使用する言語については、日本語を原則としますが、留学生や海外在住の会員等、日本語による投稿が困難な場合にのみ英語による執筆も認めます。ただし、論文が受理され研究発表論文集に掲載された場合には、投稿者（筆頭著者）が研究発表会において口頭発表を行なうことが義務付けられますので、ご注意ください。

### （4）投稿論文の頁数（要領2.「頁数」）

頁数は論文集の刷り上がりにおいて4頁を原則とします。ただし、2頁分の印刷実費を投稿者（筆頭著者）

が負担することを前提に、6頁も認めます。この頁数は投稿時に申請するものとし、校閲・修正段階での変更は認められません。また、論文集委員会の判断により、4頁から6頁に増頁することを認める場合があります。この場合も印刷実費は投稿者（筆頭著者）の負担となります。5頁は認められません。

#### (5) カラーの使用（要領3.「カラーの使用」）

図表等にカラーを用いて投稿された論文は、印刷時にもカラーを使用するものとします（カラー印刷料は投稿者（筆頭著者）負担）。印刷時にカラーを用いることを希望しない場合には、原稿（校閲用論文）もモノクロによるものとしてください。ただし、校閲・修正段階において、論文集委員会がカラーを用いることを勧告する場合があります（この場合もカラー印刷料は投稿者（筆頭著者）負担）。

#### (6) 査読を希望する分野

投稿にあたって、校閲を希望する分野を、以下の8分野からひとつ選択し、登録票（電子申込は画面の指示に従う）に記入してください。

- ①造園学原論および造園史
- ②造園材料・施工および管理
- ③造園計画（庭園計画，公園計画，風景計画）
- ④都市および地方計画
- ⑤ランドスケープ・エコロジー
- ⑥情報処理・知覚
- ⑦論説
- ⑧事例・調査研究

※平成20年度より⑦論説論文，⑧事例・調査研究論文のカテゴリーが新設されました。⑦論説，⑧事例・調査研究は、ともに学術論文としての前提や論理展開のもと、結論や目的，対象，方法，結果等が客観的に明示された上で，⑦論説は「学術的な議論の対象として意義および独創性が認められる論説であること」，⑧事例・調査研究は「特色ある事例・調査で造園に関する新規，独自の知見，情報を含むこと」を基準として校閲を行います。（⑨査読に関わる基準もあわせてご覧ください）

#### (7) 投稿論文の受付

投稿された原稿は仮受付し、投稿規定、執筆要領に定められている事項に抵触していないかどうかの規定審査を行ないます。論文集委員会ではその内容、程度によって、①受理通知を送付する、②疑問点等について投稿者（筆頭著者）に確認を行う、③訂正依頼を送付する、の3つの手続きのどれかをとります。

#### (8) 論文の査読プロセス

論文集委員会は論文1編につき2名の校閲委員を選び、査読を依頼します。校閲委員による査読の結果は論文集委員会が取りまとめ、投稿者（筆頭著者）に通知します。採用が決定した場合は受理を通知します。不採用の場合には、校閲委員会の最終判断を経て不採用を通知します。要修正の場合には、修正期間を定め、投稿者（筆頭著者）に修正を通知します。定められた修正期間内に修正原稿が論文集委員会に到着しない場合には、不採用となります。

2名の校閲委員の査読では採否が決定し得ない場合には、第三校閲者を選び査読を行います。この場合は、査読に要する時間が長くなるため、投稿者（筆頭著者）への通知は通常よりも遅れることとなります。

#### (9) 査読に関わる基準

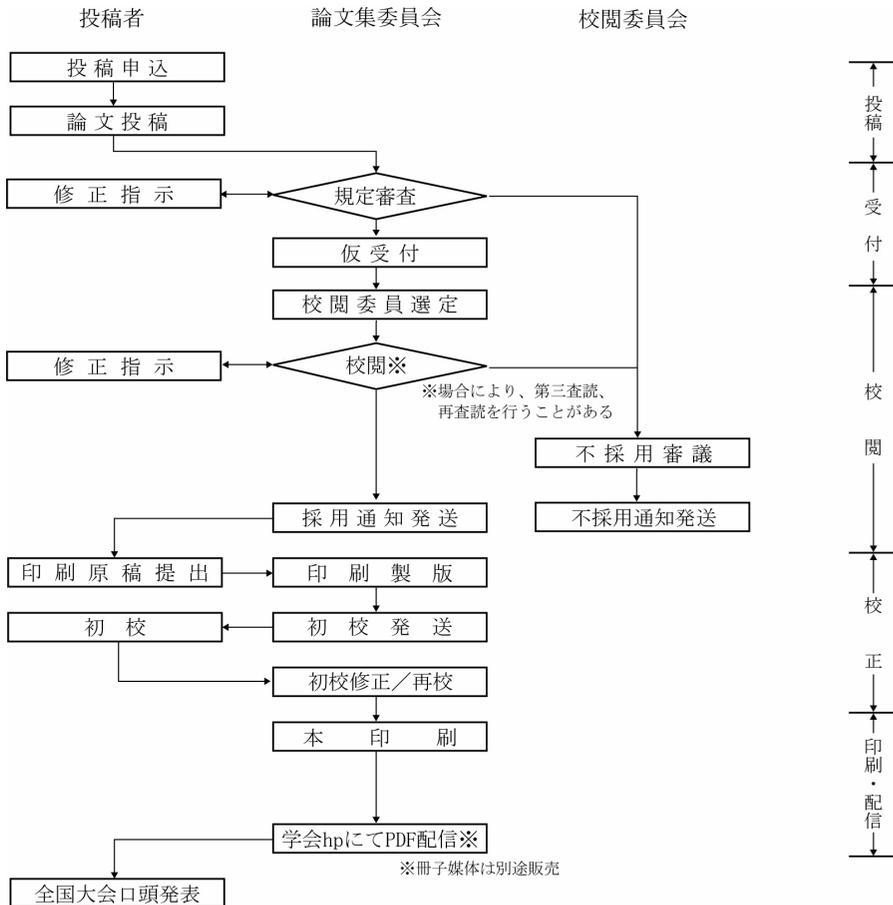
論文の査読における判定基準は下記の項目によります。

- ・研究目的の設定の明確さ
- ・研究の意義，オリジナリティの有無
- ・研究対象，研究方法の適切さ
- ・分析と考察における論証の適切さ
- ・結論の有用性と発展性

- ・ 学術論文としての表現，形式の適切さ
- ・ ⑦論説では，上記判定基準の「分析と考察における論証の適切さ」を「考察における論理性」に，「学術論文としての表現，形式の適切さ」を「論説論文としての表現，形式の適切さ」にそれぞれ置き換えるものとします。
- ・ ⑧事例・調査研究では，上記判定基準の「分析と考察における論証の適切さ」を「事例・調査に関する記述および結論等の客観性」に，「学術論文としての表現，形式の適切さ」を「事例・調査論文としての表現，形式の適切さ」にそれぞれ置き換えるものとします。

#### (10) 査読・印刷の流れ

ランドスケープ研究論文集の発行は，ランドスケープ研究発行のプロセスに準拠しつつも，全国大会研究発表会にあわせた時間的制約のなかですすめられます。会員諸氏のご理解とご協力をお願いいたします。



研究発表論文集（ランドスケープ研究NO.5）発行の流れ

・ なお，平成19年度よりポスターセッションによる発表も新たに導入されています。平成21年度全国大会の口頭発表の方法については，内容確定次第，学会HP等を通じて投稿者（筆頭著者）にお知らせします。

## ■ランドスケープ研究論文集投稿規定（平成19年7月1日一部補足，平成20年6月14日一部修正）

日本造園学会全国大会研究発表会において発表しようとする者は、本規定により論文を投稿するものとする。

### 1. 投稿資格

投稿者（筆頭著者）は、本会正会員または準会員に限る。ただし、共著者についてはこの限りでない。

### 2. 投稿条件

投稿は学術的価値の高い内容をもった未発表の研究論文に限る。ただし、日本造園学会支部大会で発表されたものについてはこの限りでなく、投稿できるものとする。

### 3. 投稿申込手続

投稿者（筆頭著者）は学会ホームページ内の研究発表論文集応募申込ページより、画面の指示に従い申込期間内に応募手続きをする。同一投稿者（筆頭著者）からの投稿は1編を原則とする。

学会は上記電子申込を強く推奨するが、これが困難な場合は、

- ・①表題，②申込者氏名所属，連絡先，③著者全員の氏名所属，④和文摘要（300字以内），⑤校閲希望分野を記した書類（A4片面1枚）
- ・住所氏名を記入し160円切手を貼付けた返送用封筒（角2型，A4版）

の2点を申込期間内に学会に送付し応募手続きをする。

### 4. 使用する言語

投稿原稿の作成にあたって使用する言語については、日本語を原則とするが、留学生や海外在住の会員等、日本語による投稿が困難な場合にのみ英語による執筆も認める。

### 5. 原稿の執筆

原稿の執筆は、「ランドスケープ研究論文集執筆要領」に従うものとする。

### 6. 論文の掲載

掲載が受理された論文は、PDFにて会員に配信する（学会員はホームページ内よりダウンロードする）。なお、研究論文集の冊子は、会員予約販売：2,500円（送料込），それ以外：3,000円（送料別途500円）にて販売する。

### 7. 論文投稿料および論文掲載料

論文投稿時および掲載決定時に、投稿者（筆頭著者）は以下の費用を負担するものとする。

- 1) 論文投稿に際して（論文の採否にかかわらず、全ての投稿者が負担）

- ・論文投稿料20,000円

※論文仮受付後に送付する振込用紙を用いて所定の期日までに送金すること。期日までに論文投稿料が納入されない場合は、投稿者が論文を取り下げたものとみなされ、校閲は行なわれない。

- 2) 掲載決定に際して（掲載が決定した論文の投稿者が負担）

- ・掲載料（全員）： 著者1名あたり10,000円。共同執筆の場合は、著者数分を掲載料とする（例：3名共著の場合の論文掲載料は、10,000円×3名＝30,000円）
- ・超過頁印刷料（6頁の場合）： 掲載料に加え、増2頁分の印刷費として40,000円
- ・カラー印刷料（カラー頁を含む場合）： 掲載料に加え1頁あたり80,000円
- ・別刷印刷代： 別刷は100部単位で印刷できる。100部10,000円（頁数、カラー頁の有無を問わず）

※以上の費用について、採用通知書に記載された期日までに同封の郵便振替で送金し、原文提出時に控えのコピーを同封する。送金が確認されない限り最終原稿は受理されず、印刷（PDF化）の手続きに進まない

### 8. 原稿の送付および送付先

- 1) 投稿にあたり提出するものは以下のとおりとする

①校閲用論文のコピー： 6部

②登録票（電子申込専用HPに記入されたもの）のコピー： 2部

- 2) 投稿者（筆頭著者）は、事故・校正にそなえて原文をとっておくこと

- 3) 校閲用論文は直接印刷用版下とするものではないが、執筆要領に示す形式に従い、刷上り体裁に準拠し、かつ校閲可能な質とすること。書式見本を学会ホームページよりダウンロードして使用することもできる
- 4) 登録票は、電子申込をした場合は、申込時の「登録票入力確認」画面の印刷出力を「登録票」とする。電子申込でない場合は、申込後学会より送付される登録票用紙を用いる
- 5) 原文原稿は、論文受理通知が届いた後、定める期限内に提出すること。原文提出がないときは掲載しない
- 6) 原稿の送付先は下記とする

〒150-0041 東京都渋谷区神南1-20-11 造園会館6F

(社) 日本造園学会事務局「論文集委員会」宛

## 9. 投稿者（筆頭著者）の校正

投稿者（筆頭著者）の校正は初校について行い、校正は誤植の訂正にとどめ、文章、図、表、写真の訂正および内容の変更は認めない。

## 10. 発表の義務

掲載が受理された論文は、投稿者（筆頭著者）が全国大会研究発表会において口頭発表またはポスター発表を行なうことが義務付けられる。

## 11. 著作権

- 1) 本学会が刊行する研究論文集に掲載された論文に関する著作権は著作者に帰属する
- 2) 前項の著作権の運用については本学会が代行する。但し、著作者が自己の著作物を利用する場合は、この限りではない

## ■ランドスケープ研究論文集執筆要領

### 1. 体裁

- 1) 原稿（校閲用論文）はワープロで作成し、A4用紙片面を用い本文・図・表・写真をレイアウトすること。本文は1行29字×58行×2段=3,364字、余白は上下23mm以上、左右15mm以上とする
- 2) 1頁目は表題とAbstractのためのスペースとして25行（1段組み）を確保し、和文表題（1行目）、英文表題（3行目）、Abstract（11行目以降）、Keywords（23行目）、キーワード（24行目）を記入すること。氏名は記載しないこと。26行目から2段組みとし本文を開始すること
- 3) 1頁目最下2行は所属欄として空白とすること。（所属は記入しないこと）
- 4) 活字は、等幅の明朝体を用い9ポイント程度とする。和文のプロポーショナルフォントは使用しないこと（例 MS明朝：可、MS P明朝：不可）。英文表題、Abstract、KeywordsはTimes New Roman（またはそれに相当するフォント）を用い9ポイント程度とする。Keywordsはイタリック体を用い、固有名詞等以外はすべて小文字とする。補注及び文献のフォントは本文より下げてもよいが、7ポイント以上を用いるものとする
- 5) 本文の左端に行番号を5行単位で（ページ毎）つけること。また各頁右下余白にページ番号をつけること
- 6) 1頁目の上部余白部の左隅に「電子申込受付番号」、右隅に「論文番号」記入欄（投稿時は記入不要）を設けること
- 7) 以上の体裁に従って作成された書式の見本（MS-WordおよびPDFによる）が、学会ホームページに掲載されているので適宜利用されたい

### 2. 頁数

- 1) 刷上り頁数は原則として4頁とする。ただし、2頁分の印刷実費を投稿者（筆頭著者）が負担することを前提に6頁も認める
- 2) 頁数は投稿時に頁数を申請するものとし、校閲・修正段階での変更は認めない。ただし、論文集委員会の判断により、4頁から6頁に増頁することを認める場合がある。この場合も印刷実費は投稿者（筆頭

著者)の負担となる

3) 5頁は認めない

### 3. カラーの使用

1) 図表等にカラーを用いて投稿された論文は、印刷時にもカラーを使用するものとする。カラー印刷料は投稿者(筆頭著者)が負担する。印刷時にカラーを用いることを希望しない場合には、原稿(校閲用論文)もモノクロによるものとする

2) 校閲段階において、論文集委員会がカラーを用いることを勧告する場合がある。この場合もカラー印刷料は投稿者(筆頭著者)が負担する

### 4. 表題

1) 論文の表題は内容を的確に表すものとし、40字以内とする

2) 副題、継続番号(その1, など)は認めない

3) 英文タイトルも表記すること

### 5. AbstractとKeywords

1) Abstractは、本文とは独立して投稿論文の概要が理解されるもので、目的、方法、結果、結論などを端的かつ具体的に示し、英文200語程度で表現すること。パラグラフ分けはしないこと

2) Abstractに続いてKeywords(英語)を3~6個記すこと。さらにこれに対応するキーワード(日本語)も記すこと。論文の内容を端的に表し、かつ客観性の高いことばの選択に留意すること

3) AbstractとKeywordsはともに、ネイティブチェックを受けることが望ましい

### 6. 本文

本文の見出しはなるべく: 1. XXX(行がえ), (1) YYY(行がえ), ( ) ZZZ(行がえ)として統一すること。

### 7. 謝辞

謝辞は投稿時には記入せずスペースのみ確保し、本原稿(審査後の最終原稿)にのみ記載すること

### 8. 補注・文献

1) 補注および引用文献は、1), 2)~n)の記号で、本文該当箇所右側(上付き)に明示し、本文の末尾に引用順あるいはアルファベット順で一括掲載すること

2) 文献(引用・参考)は本文にかかわりのあるものとどめ、下記に従って記載すること

①論文, 著書: 著者名(公刊西暦年): 表題(または書名): 掲載雑誌 巻(号), 頁

※単行本の場合は発行所名を記入すること。

例: 造園太郎(1998): 造園樹木の分布に関する研究: ランドスケープ研究62(3), 120-123

園芸花子(1995): 花卉入門: ランドスケープ出版社, 250pp

②インターネット上の情報: URL, 最新更新日, 参照時の年月日を明記する。

(ア)例: 森林次郎: 緑化の技法: ○○ホームページ<<http://abc.def.or.jp>>, 2001.4.30更新, 2002.10.20参照

3) 校閲の公正を保持するため、文献の著者名を「拙著」「拙稿」とは書かないこと。本論中においても「筆者らは既に……の研究を実施し」などとはせず、「\*\*の研究では…」などと客観的に記述すること

4) 文献欄も本文と同じく2段組とする

### 9. 図・表・写真

1) 図・表・写真のレイアウトに際しては、内容が十分読みとれるよう大きさや解像度に留意すること

2) 表題にはそれぞれ通し番号をつけ、図、写真は下側に、表は上側に各々図表番号と表題を明記すること

3) レイアウトは刷り上り時に第1頁目が奇数頁(見開き右頁)になることも考慮すること

### 10. 登録票

登録票は、電子申込をした場合は、申込サイトの「登録票入力確認」画面の印刷出力を「登録票」とする。なお、「登録票入力確認」画面の印刷出力を忘れた場合には、「登録票」に記入した内容を別途記入したもの

を提出すること。

#### 11. 本原稿（審査後の最終原稿）

- 1) 本原稿（審査後の最終原稿）は、完成した図表を配置した完全版下原稿のデジタルデータファイルで作成したものを提出すること。本原稿の作成にあたっては下記事項を必ず記載すること。なお提出にあたっては、形式などを通知する
- 2) 1頁目の4行目に和文著者名、5行目に英文著者名、1頁目最下2行の所属欄に和文所属を記入すること
- 3) 著者所属は、大学・学部・学科のように3項目以内で記載すること。著者が複数で所属機関が異なるときは、第1著者に「\*」、第2著者に「\*\*」（以下、同様）の記号を付け区別すること
- 4) 和文著者名の活字は明朝体を基本とし、12ポイント程度とする。英文著者名の活字はイタリック体を基本とし、12ポイント程度とする。和文所属の活字は明朝体を基本とし、9ポイント程度とする
- 5) 1頁目の上部余白部の「論文番号」記入欄、本文の左端の行番号、各頁右下余白のページ番号は削除すること
- 6) 謝辞を加える場合には、本文と補注・文献の間に記入すること

#### ■Call for papers for the Journal of JILA Volume 73 (5)

This is a call for English papers for Volume 73 (5) of the Journal of the Japanese Institute of Landscape Architecture (JILA). Volume 73 (5) aims to publish original, high-quality papers which must be presented at the JILA Annual Scientific Research Meeting held in May, 2010, at Meijo University, Aichi prefecture. Presentations must be made either in English or Japanese. Papers accepted for publication in the Journal of the JILA - Landscape Research Papers for Publication must be presented in oral and/or poster forms at the research presentation of the JILA Annual Scientific Research Meeting.

Please note that the first author must be a member of the JILA, and that author may be named first for only one paper.

#### Submission of Manuscripts

JILA members who wish to submit a manuscript must first register their submission on the JILA web site (<http://www.landscapearchitecture.or.jp/>). Online registration must be completed by no later than September 10 14:00, 2009. Manuscripts must reach the editorial board no later than September 24, 2009.

For further information please contact;

#### Teruaki Irie

Volume 73 (5) Editorial Board Secretary

Email: [teruaki@nodai.ac.jp](mailto:teruaki@nodai.ac.jp)

Or

#### Volume 73 (5) Editorial Board

Japanese Institute of Landscape Architecture

6th floor, Zoen Kaikan

1-20-11 Jinnan, Shibuya-ku, Tokyo, 150-0041, Japan.

## 平成21年度 第33回造園夏期大学 開催要領

主催 (財)日本造園修景協会      協賛 (社)日本公園緑地協会  
後援 国土交通省                      (社)日本造園建設業協会  
(社)日本造園学会                      (社)ランドスケープコンサルタンツ協会

1. 会 期    平成21年 8月26日(水)～28日(金)
2. 会 場    桐杏学園(東京都豊島区西池袋)
3. テー マ   「まちづくりとみどり・シリーズ」(第8回) - 緑の都市再生(6) -
4. 講義内容

日 時	10:50	11:00～12:00	12:50～14:20	14:30～16:00
8/26 (水)	<b>開講挨拶</b>  (財)日本造園修景協会 技術・事業委員長 樋渡達也	第1講義 <b>緑に関わる国土交通省の施策</b>  国土交通省 公園緑地・景観課 課長 小林 昭	第2講義 <b>森と小公園の再生設計をめぐって</b>  集合住宅代替えにあたり、団地の「歴史」「環境」「愛情」をワークショップにより昇華し具現化して森の再生に成功した事例と4年間にわたり進められた3つの小公園再生設計にみるリニューアルという今日的な造園設計課題への取り組みの紹介。  (株)グラク 常務取締役 白井 浩司 2008年・2007年ランドスケープコンサルタンツ協会優秀賞	第3講義 <b>終の住処は故郷の風景 介護老人施設「あさひ苑」の造園設計</b>  入居者が輝いた若き時代に見慣れた故郷の風景をつくり、施設を病院でなくそのひとらしさを取り戻す緑豊かな環境に仕立て、また、開所にあたっては造園設計者が職員に屋上緑化の目的・使い方・活かし方を解説するなどして万全のスタートをきった施設の紹介。  (株)愛植物設計事務所 代表取締役会長 山本 紀久 2008年ランドスケープコンサルタンツ協会賞最優秀賞
8/27 (木)	第4講義 <b>「アクアマリンふくしま」の環境創造型造園施工の記録</b>  一昨年紹介したユニークな水族館「アクアマリンふくしま」のビオトープ施設は1997年より過酷な自然条件・複雑な石積・パズルのようなフトンカゴ工法等の諸困難を乗り越えつつ進められた。その造園施工の詳細を全施設を担当した技術者が解説する。  箱根植木(株) 第一事業部マネージャー 大竹 保男 2008年一造会賞最優秀賞	第5講義 <b>前橋公園・日本庭園施工に見る大規模造園施工</b>  「明治の文化財建築とともに日本の伝統技術を継承する日本庭園」をテーマに伝統工法の積極的導入をはかり、行政設計監理一施工が一体となった“ものづくり”を展開した。  (有)双葉造園 代表取締役 茂木 一彦 第24回都市公園コンクール国土交通大臣賞・大規模施工部門受賞	第6講義 <b>東品川屋上庭園</b>  下水道ポンプ所屋上の庭園は隣設する公園と一体的に整備され2Fにはビオトープが、3Fにはイングリッシュガーデンがつくれ、常駐専属ガーデナーによる管理とその指導によるボランティア管理が進められて自然が少ない市街地に貴重な空間を提供している。  (株)日比谷アメニス 工事三部 課長 仲田 充伸 効イロトシイ室主任 武内 孝純 2008年屋上緑化羽部門・環境大臣賞受賞	
8/28 (金)	<b>現地見学</b> <b>東品川屋上庭園</b>  (株)日比谷アメニス 社会環境事業部 主任 萱 森 雄一郎	午後は周辺施設等自由見学 ・東品川プロジェクト ・天王洲アイルプロジェクト ・臨海副都心プロジェクト ・大井ふ頭中央海浜公園 ・東京港野鳥公園		

注. 講義内容は都合によって変更することがあります。

5. 募集人員 80名
6. 参加費 修景協力会員・造園学会会員 23,000円  
非会員 27,000円  
※参加費には宿泊費は含まれておりません。
7. 振込先 郵便振込 00150—9—41915  
銀行振込 りそな銀行赤坂支店 普通預金 0353472  
口座名はいずれも (財)日本造園修景協会
8. 申し込み先 〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-3-2 東京ビル3F  
財団法人 日本造園修景協会 TEL 03-5833-9330
9. 締切日 7月29日(水)
10. この研修は造園CPD制度の認定プログラム(11単位)です。  
※研修会場案内、現地見学集合時間等詳細は参加者にご案内致します。

#### 会場案内

##### 桐杏学園

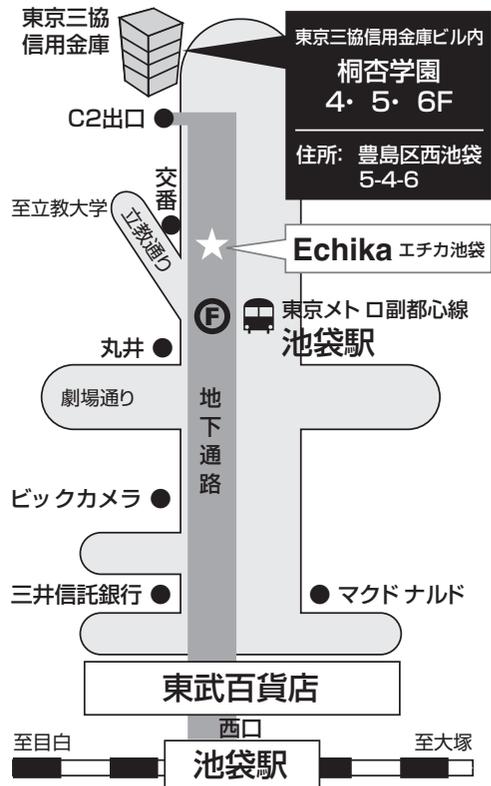
住所：東京都豊島区西池袋5-4-6

JR池袋駅西口から徒歩4分

東京メトロ副都心線池袋駅から徒歩2分

(C2出口から徒歩1分)

※駐車場はありません。



日本造園学会中部支部シンポジウム

「鶴舞公園百年の歴史と文化を考える」

日時： 平成 21 年 9 月 19 日（土） 午後 1 時 30 分から 4 時 30 分

場所： 名古屋市公会堂 4F（鶴舞公園内） 第 7 集会室

内容： 基調講演「博覧会と公園、その文化的価値」 名城大学 丸山 宏

・「鶴舞公園の誕生と発展」 名古屋市 環境局 浅井正明

・「鶴舞公園の庭園作庭考」 名古屋造形芸術大学 岡田憲久

（ 休憩 ）

・「鶴舞公園の庭園技法」 野村庭園研究所 野村勘治

・「松尾流宗匠と鶴舞公園」 （松尾流十二代家元、妙玄齋宗典 （予定）

・「ランドスケープ遺産情報の共有化」 信州大学 佐々木邦博  
～ランドスケープインベントリ整備についての提案～

・「講演者と出席者の対話」 全員

シンポジウム担当者： 丸山 宏、 岡田憲久、 浅井正明

問合せ先： 浅井正明 TEL・FAX 052-223-1223

Email. [jimu@n-kd.jp](mailto:jimu@n-kd.jp)

申込みは [JILACJILAC@gmail.com](mailto:JILACJILAC@gmail.com)（日本造園学会中部支部まで）

先着 150 名 定員になり次第締め切り

参加費 @1000円（学生無料）

## 平成21年度日本造園学会北海道支部大会案内

標記の大会を下記のとおり開催いたします。ご参加、お待ち申し上げます。

(社)日本造園学会北海道支部

◇日時・場所 2009年9月5日(土) 9時受付開始  
北海道大学 クラーク会館、農学部他(札幌市北区)

◇スケジュール

- 09:30—11:30 研究・事例報告会〈農学部S11・21講義室〉  
11:40—12:30 ポスターセッション・学生セッション〈クラーク会館講堂前〉  
13:30—13:50 北海道支部総会〈クラーク会館講堂〉  
14:00—15:30 基調講演『北のランドスケープ・150年の歴史に学ぶ』  
講師 俵 浩三 氏 (専修大学北海道短期大学名誉教授)  
15:40—17:40 シンポジウム『北のランドスケープ・150年の歴史に学ぶ』  
=先人から学んだこと、未来へ引き継ぐこと=  
パネリスト 熊井 康允 氏 (株)ジェイシーエンジニアリング  
浅川昭一郎 氏 (財)札幌市公園緑化協会  
真鍋 智紀 氏 (株)真鍋庭園緑化  
神長 敬 氏 (株)K I T A B A  
コーディネーター 近藤 哲也 氏 (北海道大学大学院農学研究院)  
18:30—20:00 懇親会〈ファカルティハウスエンレイソウ内レストランえるむ〉

◇参加費

資料代として一般2,000円(学生1,000円)、懇親会5,000円(学生2,000円)

◇「研究・事例報告会」「ポスターセッション」の申込方法

7月31日(金)までに電子メールapply@jila-hokkaido.comまたはファックス011-706-2452に、氏名、所属タイトル、口頭発表・ポスター発表を、件名「研究・事例報告会申込」「ポスターセッション申込」としてお知らせください。

◇「学生セッション」の申込方法

7月31日(金)までに所定の申込用紙を電子メールapply@jila-hokkaido.com(担当:椎野)に件名「学生セッション申込」として送信して下さい。詳しい募集要項と申込用紙は北海道支部ホームページもしくは上記アドレスに請求してください。

◇「懇親会」の申込方法

電子メールshibu@jila-hokkaido.comまたはファックス011-706-2452に、氏名・所属・人数・連絡先を明記して、件名「懇親会申込」として申し込み下さい。

## 平成21年度日本造園学会東北支部大会大会案内

平成21年度の東北支部大会を下記のとおり開催します。皆様の参加をお待ちしております。

■テーマ：まちと人の関係を再生する

■場所：詳細未定（山形市内）

■日程：10月17日～18日

【10月17日（土）】

・受付：12：00～

・総会：13：00～14：00 ※12：30～13：00に幹事会を開催します

・大会開会：14：00

・ポスターセッション：14：00～15：00

・シンポジウム：15：00～17：30

    テーマ：まちと人の関係を再生する

    基調講演とパネルディスカッション

・交流会：18：00～20：00

    エルミタージュ 山形市あこや町2丁目2-32 電話：023-623-7044

【10月18日（日）】

・エクスカーション 9：00 霞城公園南門集合

    霞城公園を見学ののち、中心市街を散策し文翔館（旧県庁舎 重要文化財）まで歩く予定です。

■参加費

・大会参加費：無料

・交流会参加費：5,000円（学生半額）

・エクスカーション参加費：無料

■ポスターセッション申込要項

作品のサイズはB1、枚数は2枚以内とし、縦づかいとします。展示に際しては、紙のまま枠にピン止めとしますので、その旨ご了解ください。提出は筒に入れて下記宛先に、9月30日（水）必着で送付してください。

また、要旨を当日資料に掲載します。原稿はA4用紙片面を用いて本文・図・表・写真等をレイアウトしてください。余白は上下23mm以上、左右15mm以上とします。本文のうゑに表題（40字以内）、著者名、所属を記し、1行29字×58行×2段の書式見本に従いワードで執筆のうゑ、9月30日（水）までに下記宛先までEメールで送付してください。

作品の返却を希望する場合は、送付の際筒のなかに、必要事項を記入のうゑ返信用の宅急便着払い用紙を同封すること。

■問い合わせ先・ポスターセッション作品要旨宛先

〒990-9530 山形県山形市上桜田3-4-5

東北芸術工科大学建築・環境デザイン学科 渡部 桂

TEL. 023-627-2072 FAX 022-627-2252

E-mail watanabe.katsura@aga.tuad.ac.jp

## 平成21年度日本造園学会関東支部大会案内

■開催月日 平成21年10月17日（土）、18日（日・予定）

■開催場所 明治大学駿河台キャンパス（18日の会場は未定）

■日 程 (1)事例・研究発表会（口頭発表、ポスター発表）(2)支部総会 (3)学生デザインワークショップ「サマースタジオ2009『再編・緑のオープンスペース』」(5)シンポジウム (6)懇親会

詳細については、日本造園学会関東支部ホームページ（<http://nodaiweb.university.jp/nkbjila/>）および日本造園学会ホームページ（<http://www.landscapearchitecture.or.jp/>）にてご案内します。

■大会参加費（予定）	参加費	会員（賛助会員を含む）	3,000円
		会員外	4,000円
	学 生	1,500円	
	懇親会費	一般（学生以外）	4,000円
		学 生	2,000円

（いずれも当日、受付にてお支払いください。）

### ■事例・研究発表の申し込み

事例・研究発表を希望される方は、8月31日（月）までにE-mail、FAXまたは郵送のいずれかにより、関東支部事務局までお申し込みください。申し込みには①発表者名（所属・学生は学年も）、②発表題目（原稿提出時に変更可能）、③発表形式（口頭発表またはポスター発表、原稿提出時に変更可能）、連絡先（郵便番号、住所〔所属先か自宅かを明記〕、電話番号、FAX番号、e-mailアドレス）をお知らせください。

申し込み後、関東支部事務局より送付される執筆要領にしたがって発表要旨（口頭発表：A4サイズ2ページ〔4,000字程度〕、ポスター発表：300字程度）を作成し、9月15日（火）必着で関東支部事務局宛に送付してください。

発表登録料は発表1件につき3,000円です。9月30日（火）までに指定口座にお振り込みください。

### ■問い合わせ・申し込み

日本造園学会関東支部事務局（担当：三島孔明）

〒271-8510 千葉県松戸市松戸648 千葉大学園芸学部 緑地環境学科内

TEL&FAX 047-308-8898 E-mail kanto.jila@gmail.com

## 平成21年度日本造園学会中部支部大会 開催案内(第1報)

標記大会を下記の要領で開催いたします。会員各位のご参加をお待ち申し上げます。

日本造園学会中部支部

支 部 長 井上 忠佳

大会運営委員長 阿蘇 裕矢

■開催日 平成21年10月10日(土)～11日(日)

■場 所 静岡文化芸術大学 (〒430-8533 浜松市中区中央2-1-1)

■日 程

〈第1日目 10/10(土)〉見学会(浜松モザイクカルチャー世界博2009会場/はままつフラワーパーク、  
浜松市動物園) ……13:00～17:00  
(集合13:00 浜松駅前、シャトルバスで約40分、ないし定期バス)遠鉄バス、「館山寺温泉」行き  
を利用します。

懇親会(会場:未定) ……18:00～20:00

〈第2日目 10/11(日)〉研究発表・事例報告(口頭発表・ポスター発表) ……9:30～12:00

幹事会 ……12:30～13:00

支部総会 ……13:00～13:30

公開シンポジウム ……13:30～16:30

・(仮)URBIO2010の開催について 鎌田磨人(徳島大学工学部)

・浜松市の公園緑地政策の展開 (講演者未定)

■参加費 大会参加費(資料代):3,000円(学生1,000円)

※公開シンポジウムは参加無料です。

見学会参加費:約3,000円

(内訳)浜松駅(定期バス)からバス停「フラワーパーク」まで往復1,000円(所要時間40分程度)、入場料  
(当日一回券)1,800円(割引券などは直接お求めください)。

懇親会費:6,000円(学生は3,000円)

■参加申し込み

〈見学会・懇親会の申し込み〉

下記の①～⑤の項目を明記の上、EメールまたはFAXでお申し込み下さい。

申込み締切り:9月20日(日)17:00

送 付 先:(Eメール)aso@suac.ac.jp

件名に必ず「造園中部」の文字を入れて下さい。

(FAX)053-457-6176(直通・Fax)

記 載 項 目:①見学会・懇親会の別

②参加者名

③所 属

④連絡先電話番号

⑤Eメールアドレス

〈研究発表・事例報告の申し込み〉

下記の①～⑤の項目を明記の上、EメールまたはFAXでお申し込み下さい。

申込み締切り:8月20日(木)

送 付 先：(Eメール) aso@suac.ac.jp

件名に必ず「造園中部」の文字を入れて下さい。

記 載 項 目：①発表タイトル

②発表者名と所属（連名可、代表者に○）

③発表代表者の連絡先（電話番号、Eメールアドレス）

④希望する発表形態（口頭・ポスター）

⑤発表内容の要旨（300字以内）

※発表には、発表者（連名の場合は筆頭者）が造園学会会員であることが必要です。

※口頭発表の発表時間は（発表10分＋質疑応答5分）の計15分です。

※申込み状況や発表内容によっては、発表形態の変更をお願いする場合があります。

※発表を申し込まれた方は、発表形態に関わらず9月20日（日）必着で、発表要旨原稿（MS-wordかPDFファイルで、使用フォントはMS-明朝及びMS-ゴシックのみ、その他のフォントはアウトライン化して下さい）をEメールでaso@suac.ac.jp宛添付してお送り下さい。

その際、件名に必ず「造園中部」の文字を入れて下さい。詳細は「発表要旨作成要領」(www.jilac.jp/index)をご覧ください。

※口頭発表者には、申し込み後、発表方法を連絡します。

※ポスター発表者には、申し込み後、発表方法を連絡します。

■会場へのアクセス（<http://www.suac.ac.jp/access/>をご参照下さい。）

【浜松駅からバス】遠鉄バス乗り場12番、くるる循環バス「西回り」→「静岡文化芸術大学」下車すぐ（乗車時間：約7分）

【タクシー・徒歩】JR浜松駅北改札口から「静岡文化芸術大学、南正門前へ」と言って下さい（約5分）。徒歩では、駅の北方面へ約15分。

■問い合わせ先

平成21年度日本造園学会中部支部大会 運営事務局

E-mail：aso@suac.ac.jp（件名に必ず「造園中部」の文字を入れて下さい。）

電話・Fax：053-457-6176（直通・Fax）、

住 所：〒430-8533 浜松市中区中央2-1-1、静岡文化芸術大学文化政策学部（阿蘇）

担 当：阿蘇 裕矢（あそゆうや）（問い合わせは可能な限りEメールでお願いします）

## 平成21年度日本造園学会関西支部大会（大阪）案内（第1回広報）

標記の大会を下記のとおり開催いたします。会員各位多数のご参加をお待ちしております。関西地区以外の方々もご参加ください。

■開催月日：平成21年10月24日（土）～10月25日（日）

■開催場所：大阪市

- ◆24日・25日：ドーンセンター（大阪府立女性総合センター）  
（大阪市中央区大手前1丁目3番49号、  
京阪天満橋駅、地下鉄谷町線天満橋駅から東へ約350m）

■日 程：

〈第1日目〉10月24日（土）

- ・学会井戸端会議
- ・懇親会

〈第2日目〉10月25日（日）

- ・研究・事例発表セッション（口頭発表、ポスター発表）
- ・幹事会
- ・総会

※関西支部では歴史・原論分野の一層の充実を図るため、歴史・原論の口頭発表セッションを構成する予定です。他の分野も含め、みなさま、奮ってお申し込みいただけますよう、よろしく願い申し上げます。

■参加費用：大会参加費（一般）3,000円（学生）1,000円  
懇親会費（一般）5,000円（学生）2,000円

■参加申込：

〈研究・事例発表の申込〉：以下の1)～6)の項目を明記の上、9月18日（金）までに、下記の支部事務局あてに、メールまたはFAXで申し込んでください。（できる限りメールにてお願いします。）

- 1) 著者名、所属（発表者の名前の先頭に○をつけておいてください）
- 2) 希望する発表形態（口頭またはポスター）
- 3) 発表タイトル（日本語および英語）
- 4) 発表内容のキーワード（日本語および英語、各3～5）
- 5) 発表内容の要旨（300字以内）
- 6) 連絡先（メール、ファックスおよび電話）

- ・口頭発表およびポスター発表の発表時間配分は、申込件数に応じて調整します。
- ・申込状況や発表内容によっては、発表形態の変更をお願いする場合があります。
- ・口頭発表を申し込まれた方には、9月30日（水）必着で、発表要旨集の原稿A4・2頁の提出をお願いします。
- ・ポスター発表を申し込まれた方は、当日（10月25日（日））、会場へ直接ポスター（パネルまたは紙）をお持ち下さい。なお、ポスター1件の割り当てスペースは、幅90cm・高140cm程度を予定しています。
- ・口頭発表については、3～5報のセッション制でディスカッション時間を設けます。

- ・ポスター発表では、指定された時間にポスターの前でのプレゼンテーション、質疑応答をお願いします。
- ・申込時の内容を大会報告等としてデータ提供する予定です。

〈懇親会の申込〉：10月16日（金）までに下記事務局までお申し込みください。

■申し込み・問い合わせ先：

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院農学研究科環境デザイン学研究室内

日本造園学会関西支部事務局（担当：今西純一）電話：075-753-6099、FAX：075-753-6082

メール：imanishi@kais.kyoto-u.ac.jp

ホームページ：[http://www.landscape.kais.kyoto-u.ac.jp/jila\\_w/annai.html](http://www.landscape.kais.kyoto-u.ac.jp/jila_w/annai.html)

<大会会場案内図>



## 平成21年度日本造園学会九州支部大会案内

本大会は、福岡県北九州市において、日本造園学会九州支部大会と日本ビオトープ管理士会全国大会を合同で行います。下記のとおり開催いたしますので、会員各位の研究・事例報告の発表ならびに大会へのご参加をお待ちしております。

■開催月日：平成21年11月21日（土）～22日（日）

■開催場所：北九州国際会議場（住所：〒802-0001 北九州市小倉北区浅野三丁目9番30号）

■大会テーマ 「都市と自然の共生 ～ランドスケープとエコロジー～」

九州支部大会統一テーマ「あなたの自然と身近な共生景観」

### ■日 程

〈第1日目〉11月21日（土）（内容時間は予定）

研究・事例報告（1） 9：00～11：45

昼食（学会幹事会を含む） 11：45～12：30

学会支部総会 12：30～13：00

研究・事例報告（2） 13：00～14：30

講演会 14：40～18：20

講師：武内和彦、池谷奉文、亀山 章、養父志乃夫

総括：蓑茂寿太郎（敬称略）

交流会 18：30～20：00

（交流会時に、優れた研究・事例報告を表彰します。）

〈第2日目〉11月22日（日）

テクニカルツアー（現地見学会）

### ■最新情報

支部大会の最新情報は、下記のWEBサイトをご覧ください。

<http://www.qzouen.jp/>

### ■研究・事例報告の申込み

研究・事例報告会で発表（口頭もしくはポスター）を希望される方は9月11日（金）までに、電子メール、または郵送・FAXのいずれかにより下記、支部事務局までお申し込みください。申し込みに際しては、①発表者名（所属）、②発表題目（原稿提出時に変更可）、③発表形態、④連絡先（住所、電話、e-mail、FAX）をお知らせください。

研究・事例報告集の原稿は、申し込み後、送られてくる投稿・執筆要領にしたがって作成し、〔A4判2ページ（4000字程度）〕、10月9日（金）必着で、投稿・執筆要領が指定するあて先に送付してください。掲載料は、1報告につき3,000円です。

■問合せ・申込み 日本造園学会九州支部事務局（担当：朝廣和夫）

〒815-8540 福岡県福岡市南区塩原4-9-1

九州大学 芸術工学研究院 環境・遺産デザイン部門 内

TEL/FAX 092-553-4480 E-mail qzouen@design.kyushu-u.ac.jp

## 口頭発表

### 1. 自然公園でのレクリエーション利用におけるリスク管理への一考察

小林昭裕

(専修大学北海道短期大学みどりの総合科学科)

近年、安全・安心に対する社会的関心の高まりを受けて、都市公園を始め、自然公園でのレクリエーション利用に伴う事故発生に対する対策が重要課題となっている。都市公園では主に施設利用に伴うケガや事故への対策が、自然公園では突発的な自然現象（落雷、雪崩、鉄砲水など）、野生動植物による被害（ヒグマとの遭遇、スズメバチによる刺され、ウルシによる皮膚カブレなど）に対するリスク管理が、社会的論議を呼んでいる。本論では、自然公園における野外レクリエーション利用におけるリスク管理について若干の資料を概観し、今後の対応策や課題について整理した。

### 2. 街路樹ニセアカシアの外部損傷と内部腐朽について（2）

石井弘之（北海道立林業試験場緑化樹センター）

街路樹として植栽されているニセアカシアの木部が露出する損傷の幹内部への影響について調査した。損傷の規模にかかわらず幹内部に変色は発生していたが、木部露出の影響で腐朽が広がっている事例はなかった。また、変色広がり損傷の規模、露出面の性状との関連も見られなかった。ニセアカシアで木部露出が見られる場合、外観から幹内部の状態を推定することは難しいが、心材腐朽の原因にはなっていない。一方で、根株腐朽によるキノコの発生が地際の木部露出面脇から見られたことから、注意が必要である。

### 3. 北海道における地被植物を導入した畦畔景観の印象に関する研究

堀尾公美子（北海道大学大学院農学院）

松島肇・近藤哲也（北海道大学大学院農学研究院）

岡田 稔（専修大学北海道短期大学）

古橋 卓（東京農業大学農学部）

本研究は、畦畔へハーブを導入した水田景観の印象と、ハーブの香りが景観評価と気分を与える影響を把握し、畦畔への導入に適した植栽を提言するこ

とにより、ハーブの観光資源化について検討することを目的とした。写真を用いた評価実験の結果から、畦畔への導入には白系統の花の単値が適すると考えられた。また、現地での散策実験の結果から、ハーブの香りが景観評価や気分を与える影響は見れなかったが、ハーブ植栽のある景観に対する評価は写真よりも実物に対する方が高かった。以上から、ハーブを観光資源として用いる際は、畦畔植栽に適した植物種や形態を考慮することに加え、現地を訪れてもらうための工夫が必要であると考えられる。

### 4. 和歌の浦景観保全訴訟から20年一争点は何だったのか一

赤坂 信（千葉大学大学院園芸学研究科）

和歌の故地に建設される車道橋に反対する「和歌の浦景観保全訴訟」では5年間、その景観上の適否をめぐる法廷で争われた。当時、万葉時代以来の歴史が強調されるなかで、争点は何だったのか考えたい。不老橋と背景の名草山が織りなす「和歌の浦の風景」の存続を考えた場合、近世末期に作られた橋であろうと不老橋とのSettingを脅かすものとして車道橋ないしその先のリゾート開発構想を位置づけることができたのではないか。不老橋はまた紀州藩がその百年前に造られた建造物群を意識して造ったもので、またそれらは万葉以来の古層の上に成り立つ。車道橋反対をいうならば、万葉時代に眺められた景観に軸足を置く争点が曖昧にならざるを得ない。

## ポスター発表

### 1. 日露共同研究としての景観評価比較研究

青木陽二

(国立環境研究所社会環境システム研究領域)

松島 肇（北海道大学大学院農学研究院）

PETROVA Elena（モスクワ大学地理学部）

日本とロシアは国境線を接しているが、お互いの気候風土や文化的背景は大きく異なっている。気候風土や文化的背景の違いと風景評価の関連を研究するには、国境を接する2つの国で、同じ風景を両国民に評価させ、結果を比較するのが簡単な方法であると言われている。しかしながら、両国の言語の違いや交流の少なさから今までこのような試みは行わ

なかった。本研究では、日本とロシアの人々に両国で撮影した写真を見せ、評価させることにより、両国の人々の風景理解の違いを明らかにすると共に、評価される風景要素の特徴について明らかにするものである。

## 2. フォトコンテスト写真からみた北海道美瑛町における被写景観構造の把握

岡田 穰

(専修大学北海道短期大学みどりの総合科学科)

土屋 瞳 (山形県庁)

本研究では観光客からの視野という観光概念に着目し、美瑛町フォトコンテストへ応募された写真を「好ましい景観の被写体」と解釈し、景観構成分析から美瑛町で好まれる被写景観構成の把握を行った。その結果、既存文献で良いとされた畑作物有、空、丘、肌理勾配の被写面積比が高く、悪いとされる均平化、裸地などの被写面積比が低いことが確認された。また、クラスター分析より6種類の景観パターンに分類でき、これら景観が美瑛の農村景観として観光客に捉えられ農村景観を観光資源のひとつとして活用していくためにはこういった景観構成要素と景観パターンを維持していくことが必要であると推測される。

## 3. 「円山動物園の森」ビオトープ計画のための森林群落の評価

矢部和夫 (札幌市立大学デザイン学部)

桑原禎知 (Kon Photography & Research)

酒井正幸・吉田和夫 (札幌市立大学デザイン学部)

円山動物園の森林ビオトープの植物群落整備デザインを策定するために、動物園およびその周辺地区の森林群落の組成構造とその分布を中心とした生態系調査を実施し、この森林群落の特徴を明らかにした。円山地区の森林群落の中で、最も大きな群落傾度(群落変化の方向)は乾生林から湿生林という傾度であった。この森林は、皆伐のような強い攪乱後にはできる陽樹林(シラカンバ)ではなく、そのほとんどが軽～中程度の攪乱を受けているものの、自然林の優占種が残っている林であった。したがって円山地区の森林は、自然林の優占種が林冠に残存する程度の、軽～中程度の人為的な攪乱を受けた、里山的な森林である。

## 4. 農と食のまちづくり—札幌市南区のボランティア活動を通して—

吉田恵介 (札幌市立大学デザイン学部)

札幌市南区砥山地区の近隣住民が集まり、2002年より地域の環境保全、活性化、会員の親睦などを図るため、八剣山発見隊によるまちづくり活動を行ってきた。現在では年間行事も恒例化してきており、今後は息の長い活動を目指している。多くの行事(花見会、ごみ清掃、リンゴの実づくり体験、果樹の残果整理と収穫体験、試食会、剪定講習会)の中で、最も多くの来客数を迎えるさくらんぼ祭り(本年は第七回目)についてボランティアの関わり方の現状と今後の課題について明らかにした。運営組織と経費のコスト削減化と効率化により、参加するボランティアの満足度と参加意欲を上げることなどの重要性が参加者のアンケート結果から得られた。

**ポスター発表****1. 隙間をうめるデザイン**

温井 亨（東北芸術工科大学デザイン工学部  
建築・環境デザイン学科）

日本の都市や風景が混乱している一因は、総合的な計画、設計が行われていないことによるのではないかと。しかし、そのような制度も慣習もない中でどうしたら良いのか。東北芸術工科大学大学院棟新築、最上川川前船付場建設、山形市立第一小学校保存再生という3つの事例における筆者の試みを報告し、それを「隙間をうめるデザイン」として捉え直すことで、総体としての風景を手に入れる方法について考えた。どの事例に於いても、筆者の関わりは変則的な隙間を埋める形のものであった。また、そこに見出されたのは、重要なことであるのに当初の計画では抜け落ちていたり、意識されずにいたり、前例のない試みであるために制度の枠組みから漏れている事柄であり、隙間をうめる形で作業する必要であった。具体的には、サイトプラン、周囲の風景との調和、自己主張を避け群としての造形を行う必要性、使い手や地域の人が設計段階から参加すること、などが挙げられる。

**2. 児童の遊び場に関する調査研究**

鈴木 大

（日本大学工学研究科博士前期課程建築学専攻）

土方吉雄・三浦金作（日本大学工学部建築学科）

近年、少子化や子どもを狙った犯罪が社会問題となり、子どもを取り巻く環境変化は著しく、子どものライフスタイルの多様化に伴い、「外遊び」から「内遊び」へと変化するなど遊び環境も変化してきている。本研究は、遊具及び休息施設の配置関係と公園の使われ方に着目し、公園における「遊び」「移動」と遊具配置の関連性及び、休息施設の配置と「休憩」行動について捉えることで、現状では基準の定まっていない「遊具」及び「休息施設」の配置方法に関する基礎的指針を得ることを目的としたものである。公園観察調査、仮設ベンチ設置公園観察調査の分析結果より、遊具及び休息施設の配置は児童の遊び行動に大きく影響することが確認でき、これらの配置方法に関する設置基準の必要性を把握できた。

**3. 癒しの音を楽しむ 水琴窟**

渋谷 亨（有限会社造景工房）

森山雅幸（宮城大学食産業学部環境システム学科）

本設計は、江戸時代に始まる庭の遊びの一つである水琴窟の構造と衰退していく原因を究明し、新たな「癒し」の水景施設としての可能性について検討することを目的とした。くつろぎや安らぎを提供する公共空間は、人々の暮らしに様々な効能をもたらしている。「水琴窟」は、ストレスや精神への関心が高まる現代社会の中で、限られた公共空間におけるミニマムな場の活用であり、だれもがまちなかの身近な場所で「癒し」を感じることが出来る場づくりの一施設として考えられるものである。

## 口頭発表

1. 国際社会における海外の日本庭園の意義と役割  
～研究の構想と目的～

鈴木 誠 (東京農薬大学地域環境科学部造園科学科)

『海外の日本庭園』調査報告書』(日本造園学会、2006)が刊行され、世界中の432ヶ所の公開日本庭園の実態が整理され、その全体像が明確になった。しかしこの報告書では、海外の日本庭園の存在意義と担うべき役割の詳細な検討、にはいたっていない。そこで、調査報告書を基礎として、「海外に日本庭園が造園される意義」の観点から関連情報を整理し直し、それに追加調査による情報を加えて、海外の日本庭園の担うべき役割を明確にし、将来的な庭園の在り方、管理・運営に関する具体的提言をまとめることを企画した。本報告では、この研究の構想と目的、これまで得られている海外の日本庭園の意義と役割に関連した知見をまとめた。

## 2. オーストラリアの姉妹都市にみる日本庭園の役割

牧田直子

(東京農薬大学大学院農学専攻)

服部 勉・鈴木 誠 (東京農薬大学)

前島香保・内田 均

(東京農薬大学短期大学部環境緑地学科)

日本各地の自治体と諸外国の都市との間で、姉妹(友好)都市締結が増加する中、文化交流や友好の一助として、海外に日本庭園が造園されている。本研究は、「海外の日本庭園調査報告書」(日本造園学会、2006)のデータを基本としつつ独自の調査をさらに実施し、オーストラリアの姉妹(友好)都市に造られた24の日本庭園について考察した。調査分析の視点は、造園の経緯や現況、管理運営状況、庭園の社会的意義・役割などである。現地調査は2008年8月オーストラリア国内の17ヶ所の日本庭園で実施した。その結果、①記念品により構成された日本庭園、②日本庭園の空間を舞台として文化伝統紹介、③国家間友好象徴、の3つの類型によりその概況と活用実態を整理して報告した。

## 3. オーストラリアにおける日本庭園の管理運営の現状と課題

前島香保・内田均 (東京農薬大学短期大学部)

牧田直子 (東京農薬大学大学院)

服部 勉・鈴木 誠 (東京農薬大学)

現在433の日本庭園が海外に存在し、その多くが姉妹都市などの自治体同士の友好を目的としたものであることがわかっているが、これまで、その管理運営については調査がなされてこなかった。本報では、オーストラリアを事例とし、17庭園への現地訪問調査及び関係者へのヒアリングから、管理運営について現状を調査することとした。その結果、緑や花、紅葉など一年中楽しめる自然と、水の流れや静寂さといった癒しの空間が、オーストラリアの人々の憩いの場となっていることが伺えた。一方、剪定・手入れの課題やいたずらによる被害、日本庭園同士の横のネットワークが無いという実態が明らかになり、作庭後のアフターケアの重要性が明らかになった。

## 4. デジタルカメラ画像による歩行景観の3次元解析

國井洋一 (東京農薬大学)

わが国における山岳性自然公園は、散策中に様々な眺望や景観を楽しむことができる貴重な資源である。そのような現地の雰囲気や記録する方法として、歩行中の眺望の撮影が考えられる。しかしながら、そのような撮影により得られる情報は、一定方向の眺望を2次元平面に投影したものにすぎないため、景観をよりリアルに再現することが課題となる。そこで、本研究では歩行者が進行方向に向かって撮影したデジタルカメラ画像のみを用いて3次元計測を行う手法について検討を行い、さらに景観シミュレーションへの応用に向けた3次元モデリングも試みた。

5. 湘南海岸地域に保有する環境財に関する一考察  
—屋外広告物を中心として—

笹田勝寛 (日本大学生物資源科学部)

島田正文 (日本大学短期大学部)

河野英一 (日本大学生物資源科学部)

勝俣亜子 (株ネクスト)

神奈川県下では、景観法の施行にともない各市や町が景観行政団体となり、景観基本計画の立案や見直しが行われている。その際には、自治体個々が、

その地域の景観資源等をもとに、個性・固有性を重視した計画立案が必要となる。そこで、本研究では、相模湾沿岸地域、特に藤沢市及び隣接する鎌倉市、茅ヶ崎市からなる湘南海岸地域を対象とした景観に係わる現状の把握として、環境財の中でも景観を構成する要素の1つである屋外広告物に注目して、使用目的・規格・色彩・設置者・種類・設置場所について調査と考察を行った。今後の景観保全・再生・創出にあたっては、自治体あるいは沿岸住民が協議会などを通して、より一層の連携を深め、協定等を結んで屋外広告物の規制や誘導を図る必要があると考えられる。

#### 6. 旧松之山町におけるスギ林の分布様式に注目した景観の型式とその成立の考察

横関隆登・下村彰男・伊藤 弘  
(東京大学大学院農学生命科学研究科)

本稿では、家屋の材や稲作のはさ架けにつかう立木としてスギと生活との関わり合いを持つ地域として、旧松之山町を選定し、旧松之山町における景観を、景観構成要素の組み合わせである景観構造におけるスギ林の分布様式の観点から分析し、その成立要因を考察する。本研究では、はさ木の地域性が明らかになり、今回の調査の課題として住宅用に植林されたスギと住民生活との関わりに着目することを仮説に立てた。

#### 7. A STUDY OF JAVANESE CITY CENTER AND ITS ORIENTATION

Roni WIJAYA, Akio SHIMOMURA  
(東京大学大学院農学生命科学研究科)

Anyone going around Java Island - Indonesia, from one city to another, will certainly come across 'Alun-alun' in the center of the downtown of almost every city. Alun-alun' is part of Javanese traditional city center concept along with 'Kraton' (Javanese palace). This concept and the structures within it has been the most important characteristic of Javanese cities that remains. Despite the fact that Javanese cities have rich variety of tradition, Javanese cities have been faced various social and economic problems and encountered by identity crisis in the city planning.

Because of the reasons, it is very important to recognize the value of Javanese city's characteristics regarding to manage city planning in the future. This study aims to examine the relationship of cities of Java and surrounding nature by studying the orientation of its city center from cultural context of landscape. Additionally, to make clear on the city center setting and orientation of cities in Java related to Javanese city planning. The object of this study will be the Javanese city center of cities/regencies of Java Island. Preliminary survey was performed to make a deep investigation of the Javanese city center concept based on the literature study. Map study will be applied as basic analysis with support of Topographical map and aero-photograph as data sources. From the tentative result we can see the continuity of the Javanese city center concept occurs in most cities of Java. And by analyzing all available data, it potential to clarify the relationship of the city center and surrounding nature from its original concept point of view.

#### 8. 相模ダム・宮ヶ瀬ダムにみられる観光展開の違い

菅原 晋 (東京大学大学院農学生命科学研究科)

ダムは、治水・利水に大きな役割を果たしてきたが、近年では水源地域への還元も考えられ地域密着型が目指されるようになり、観光地化が増大している。本研究では、戦時中に作られた相模ダム、近年建設された宮ヶ瀬ダムという、同水系の2つのダムを取り上げ、観光・地域面での特徴及び差異からそれぞれの成立といかに関連付けられるかを考察した。歴史も古く、水特法以前から観光面も整備されてきた相模ダムは、時間をかけて歴史や地域性を踏まえての観光展開がなされているのに対し、近年建設の宮ヶ瀬ダムは大きく発展を示しているものの、行動が制限される側面が見られるなど管理されがちである。観光客の要求を満たし、地域に基づいた観光展開が期待される。

#### 9. 団地再生に資する屋外空間の活用に関する研究 —日本住宅公団期に整備された団地屋外空間の特

性について—

武田重昭（独立行政法人都市再生機構）

今後の団地再生・再編においては、これまで培われてきた生活価値・文化を継承し、居住者の居住の安定を確保しつつ、地域及び団地毎の特性に応じた再生・再編に取り組むことが求められる。本研究は、日本住宅公団期（昭和30～55年）の団地屋外空間を対象に、当時の整備方針や研究課題、居住者の評価及び利用実態などから、日々の生活の中でどのようにして団地の居住環境が育まれてきたのかを振り返ることで、次世代へ受け継いでいくべき団地屋外空間の特性を把握し、今後の活用のある方について考察を行うものである。

#### 10. 環境共生型住宅レーベンスガルテン山崎のビオ・ガーデンに対する居住者評価

小木曾 裕（㈱URリンケージ）

レーベンスガルテン山崎は環境共生型住宅で、整備の中心のビオ・ガーデンに対する居住者の意識を把握し、居住者の求める姿を明らかにした。居住者は身近な場所にビオ・ガーデンがあることを約9割の人が良いと評価し、「流れや水の潤い・野鳥のいる自然な雰囲気」と8割の人が認識していることがわかった。ビオ・ガーデンを通りながら眺めて利用する人が多く、70代以上の高齢者は約9割と高い値を示すとともに、ビオ・ガーデンの存在は約5割が入居の決め手または一助となっていることがわかった。ビオ・ガーデンは居住者にとって価値は高く、適切な管理も行われることによりその存在価値がより明確になることが示唆された。

#### 11. 鮫川村の館山公園における参加協働型の公園再生計画および整備プロセス

平田太良（東京農科大学地域環境科学部造園科学科）

入江彰昭（東京農科大学短期大学部環境緑地学科）

全国の中山間地域の約6割は過疎地域であるという現状と同様に、鮫川村でも耕作放棄地や荒れた山林が増え、里山景観が荒廃するという環境問題が加速している。本研究では、鮫川村の館山跡地の放棄された山林が住民、役場、都市住民がどのように参加協働して公園として再生させているのか、そのプロセスを明らかにすることを目的とした。その結果、館山公園の再生は役場が2005（平成17）年の第3次

鮫川村振興計画において館山公園の再整備を位置づけたことに始まり、大学と参加協働して県の森林環境税交付金事業にトライシ補助されることとなったこと、役場の呼びかけで2007（平成19）年2月のボランティア活動では130人の住民、小中学生、都市住民、役場職員が参加して整備作業を行ったこと、など地元の住民のみならず、都市住民も参加しており、地域の枠を超えた取り組みに発展していることがわかった。

#### 12. 鮫川村葉貫集落の農家を事例とした里山の農林業の営みの定量化に関する調査研究

上田早織（東京農科大学地域環境科学部造園科学科）

入江彰昭（東京農科大学短期大学部環境緑地学科）

近年、農業就業者の高齢化や後継者不足により、耕作放棄地が増え里山景観の荒廃が引き起こされている。農業の営みを持続させることが里山景観の保全となると考えられるが、これまで里山農業の営みをシステムとして捉え、各種農作業を定量的に把握した研究はあまり事例がない。そこで、鮫川村の葉貫集落で農業を営む農家を対象として、里山における農業の営みを定量化することを目的とし考察を行った。その結果、鮫川村の里山では主に畜産業を中心とした営みにより里山自然を利用することで、循環型サイクルができることが詳細に知ることができた。

#### 13. 環状八号線の中央分離帯の形状とゴミ散乱状況に関する調査研究

三上真智子・入江彰昭

（東京農科大学短期大学部環境緑地学科）

砧公園に隣接する環状八号線の中央分離帯では道路美化、大気や騒音などの環境改善等に寄与するにもかかわらずゴミ捨て場と化している。そこで本研究では、ゴミが捨てられにくくなるような植栽帯があるのではないだろうかと仮説し、世田谷区内の環状八号線の植栽帯のある中央分離帯のゴミの現状を明らかにし、中央分離帯の形状の違いによる考察を行った。その結果、信号機の付近で渋滞が起りやすい分離帯では著しくゴミが散乱しやすい傾向が見られ、分離帯の形状として高木下部に生垣や低木が植栽され下枝や葉で地面が覆われている分離帯ではゴミが多いことから、植栽形状として下枝を透かし

風通しのよい分離帯植栽がゴミも目立ちやすく掃除もしやすいので、望ましいのではないかと思われる。

#### 14. 江東区ピオトープガイドブック1. 維持管理編の発行について

清田秀雄（江東区役所土木部水辺と緑の課）

江東区では、1988年より順次、河川敷、公園、小学校、幼稚園にピオトープを設置してきた。現在43箇所、総計約2.5ヘクタールの広さを持つ。1996年よりピオトープの環境管理を目的としたボランティア育成講座を行い、それぞれの環境管理については、その修了生によるボランティア管理を1998年より行っている。10年を経過し、それぞれの経験則による管理が目立ち、必ずしもよい状態を保てない場面が出てきた。そのため、全体の基本的な考え方を再整理し、最低限守るべき事項（共通認識）を記したガイドブックが必要となった。そこでボランティア有志と区の事務局協働でガイドブックを作成した。本誌は実際の環境管理と育成講座のテキストとして利用している。

#### 15. 公園におけるドッグランの運営と課題

近江慶光（千葉大学）

近年、犬を単なるペットとしてではなく、家族の一員として考えている人々が増加し、従来以上に公園での散歩に犬を連れて行く人が増えてきたために、公園内にドッグランが設置されるようになってきた。本報では、公園につくられたドッグランの現状について調査し、その現状と今後の課題について検討した。ボランティア組織によるドッグラン管理を行っている千葉県立柏の葉公園において、管理者ならびにボランティアスタッフにヒヤリングを行い、その実態について調査した。柏の葉公園のドッグラン運営の特徴として利用に先立ち、事前に登録制を取っている点があげられる。利用に際し、不特定多数の利用ではなく、事前登録というハードルを科すことで利用者のモラルの徹底に成功し、無用なトラブルを回避している。管理運営上のもうひとつの特徴として、ボランティアと協働した管理が挙げられる。このような特徴的な管理運営によって順調に登録者数を伸ばし、市民の中で定着してきたドッグランとなっているが、ヒヤリングの結果、ドッグランについての知識が不足した新規加入者が増加し

たことで、利用者間の意志の疎通の問題が起こりつつあることや、利用者の要望も多様化してきていることがわかった。初期からの利用者からは、より充実した施設設備を望む声が出始めている。管理費増に直結するこれら要望に対応することは困難な状況にあり、今後、どのように応えていくかが課題となってきた。

#### 16. 対流圏、上層大気圏における植物種子の移動と種分化について

武村敏彦（武村研究所）

対流圏、上層大気圏において種分化が誘起される機構を明らかにするために、各地方に分布する植物の種子等の移動の径路を明らかにして、現存する植物種の種分化の様相の一端を明らかにした。多くの属内の種分化は、膨潤進化が主因を成している。膨潤進化は生物の同化作用に淘汰圧が加圧した場合、あるいは長期休眠によって誘導されている。特に、種子等が休眠のまま寒冷な上層大気圏の環境下に長期間滞在した場合、休眠種子は繊細な生理作用においても、環境に対応した特性を記憶的に獲得していて、大気流に乗って移動した後に地上に降下して、膨潤進化を誘導して、種分化を誘起している場合がある。

#### 17. 25年後の林内植生構造にみるレクリエーション利用のための里山管理による花木類の保全効果

上原三知

（信州大学農学部森林科学科緑地環境文化学講座）

重松敏則（九州大学芸術工学研究院環境計画部門）

藤井義久

（九州大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー）

岩本辰一郎（有岩本商店）

里山林で25年前に実施した保全効果の継続年数について、50年間放棄された林分との比較考察を行った。その結果、25年前に実施した自生ツツジ以外の常緑樹の刈取りと、高木の間伐管理は、ツツジ等の落葉性木本、草本植物種の保存効果を維持していたが、自生ツツジの着花に必要な林内照度の低下が進んでいた。一方、50年間の無管理区では自生花木類が全く確認できず、ヤブツバキ等の特定の常緑性広葉樹が優占する暗い林床へと植生遷移が進んでいた。以上から、少なくとも管理放棄から約50年間で、

かつてのコナラ二次林に多くみられたコバノミツバツツジ等の落葉広葉樹や、林床の草本植物の多くが消失することが明らかとなった。

#### 18. スパティフィラム (Spathiphyllum cv. Mini Merry) の耐寒性と最低致死温度について

奥津めぐみ (埼玉県)

近藤三雄 (東京農業大学地域環境科学部造園科学科)

本研究は、熱帯地域原産のスパティフィラム (Spathiphyllum cv. Mini Merry) の耐寒性と最低致死温度を、屋外と人工環境気象室における生育実験を行い究明した。屋外実験は東京農業大学構内でコンテナに植栽したスパティフィラムの冬季における生育状態と気温との関係を調査した。人工環境気象室における実験は6℃～-3℃までの10段階に設定し、達観視法による生育調査、電解質溶出率や葉緑素、赤外線熱映像の測定を行った。その結果、これまで一般的に言われていた5℃よりも低温に耐えることが判明した。概ね3℃程度までは健全生育が可能であり、0℃になると枯死寸前となり、その最低致死温度は概ね-2℃であることが明らかとなった。

#### 19. 駐車場の舗装工法改善と緑化による温度低減効果

橋田祥子 (明治大学理工学部)

藤崎健一郎 (日本大学生物資源科学部)

青木新二郎 (パーク24(株)パーキング総合研究所)

加治屋亮一・酒井孝司 (明治大学理工学部)

ヒートアイランド対策に寄与することを目的とし、実際に使用されている駐車場において温度の低減を意図した舗装と緑化を行い、その効果を比較した。2008年8月1日～31日の期間において各試験区深さ7cmの地中温度の日最高値を対照のアスファルト舗装と比較すると、遮熱排水性舗装、保水性舗装、芝生、木陰において、31日の平均ではそれぞれ6.9、7.5、12.6、18.0℃、最大の日では9.8、14.7、19.2、25.7℃の差があった。最も低温になるのは木陰であり、敷地に余裕があれば高木の植栽が望ましい。次に芝生化の効果が大きかった。保水性舗装と遮熱透水性舗装は緑化に比べると効果は少なめだが、車輪による損傷やエンジン熱の影響を受けない利点がある。

#### 20. 国営公園におけるボランティア活動者の意識調査について

森本千尋・藤田聡子 (財団法人緑地管理財団)

国営公園におけるボランティア登録者数は、平成20年8月現在、3,000人を超える。これらの活動の拡がりや、公園の運営内容の充実やサービスの向上という公園管理上の必要性によるばかりでなく、一般市民の社会参加活動への関心の高さを反映していると思われる。そこで、国営公園14箇所ボランティア登録者を対象に、活動に対する意識や感想(評価)をたずねるアンケート調査を実施した。今回の報告は、全般的な傾向を見るに止まるが、今後、自由回答なども含めさらに解析を加えるとともに、他公園やその他の文化施設等との比較などにより、国営公園というフィールドでのボランティア活動の魅力や特徴を見極めたい。

#### 21. ため池の保全にかかわる人々の態度と行動—兵庫県東播磨地域における社会心理学的研究—

今井葉子 (国立環境研究所)

野波 寛 (関西学院大学)

高村典子 (国立環境研究所)

わが国の農業の内部では高齢化と人手不足が進行し、農業用水としてのため池の保全が困難になりつつある。本研究では兵庫県東播磨の1つの集落を事例に、ため池に対する農業・環境という価値観が、ため池の保全行動の意思決定にどのような影響を及ぼすかを検討した。社会心理学研究において利用される要因連関モデルを用いて人々のため池に対する保全行動に及ぼす要因を分析した。ヒアリング調査およびアンケート調査よりモデルに用いるデータを収集した。アンケート調査の結果に基づき要因連関モデルの各要因間の相関関係を数値化した結果、大部分の要因間には有意な関連性はみられたが、態度と行動の間には有意な関連性はみられなかった。

#### 22. 造園関連企業の経営動向と資質向上のための今後の対応策について

田口 剛 (埼玉県立杉戸農業高等学校造園科)

近藤三雄 (東京農業大学地域環境科学部造園科学科)

教育現場から見て、造園関連業界の活気がなくなっていると感じている。実際に業界で活躍している人たちはどのように感じているのか、また、新しい

緑化技術である屋上緑化や壁面緑化についてどのように感じているのか。業界では造園教育に対してどのように感じ何を望んでいるのかを探り、造園教育の方向性を示し、造園関連業の将来に繋げる事を目的とした。アンケートはインターネットを使用しweb調査を行った。その結果、公園の再生や建築物緑化など新たな緑化事業に着手すること、造園関連業の結束を強め、技術開発や有効な情報の発信などにより明るい未来の可能性もある。また、産学が一体となり造園界の活性化を図る必要があると感じた。

### 23. 農業関連高校出身者から見た高校ならびに大学の造園教育の評価

田口 剛 (埼玉県立杉戸農業高等学校造園科)  
近藤三雄 (東京農業大学地域環境科学部造園科学科)  
高校、大学と継続して造園教育を受けている生徒にそれぞれの教育機関で受けた造園教育について、客観的な学校評価を受け、その結果から不足感と充足感を探り、今後の造園教育の改善の資料とすることを目的とした。アンケートは農業関連高校入学時の意識、農業関連高校で受けた授業内容について、農業高校卒業後の進路について、東京農業大学への入学後の意識について行った。その結果、高校の教育は、実習を中心とした科目や基礎的な専門知識を身につけたことを良く思っているが普通教科の不足を感じていること。大学では、充実した指導者による専門知識の発展深化、広範囲な人脈の構築ができたことが良かったが実習が少ないと感じている。

### ポスター発表

#### 1. 霧ヶ峰における草原維持管理を目的とした土地被覆図の作成

熊田章子 (株式会社地域環境計画)

栗原雅博・長内健一 (霧ヶ峰ネットワーク)

近年、里地里山の生態系保全をいかに保全していくかが課題となっている。霧ヶ峰では、里地里山の一形態である二次草原の生態的变化が問題となっており、自治体等による保全活動が行われている。霧ヶ峰の二次草原はササ型草原、ススキ型草原が混在しており、それぞれ保全のための労力や方法が異なる。この土地被覆境界は既往文献が指摘する1750m

が一つの目安となるが、管理計画を立てる上ではより詳細な分類が必要である。本研究では、高分解能で安価なカラー衛星画像であるEarth Clip 25000を用いて、ササ型草原・ススキ型草原の土地被覆分類を行うことを目的とした。その結果、本研究で用いた画像が土地被覆図を作成する上で有効であることが明らかになった。

#### 2. 公園整備された遊水地における魚類相について

横川宗明・小島仁志・葉山嘉一・勝野武彦

(日本大学生物資源科学部)

神奈川県藤沢市「境川遊水地」では、多自然型川づくりの提唱などにより自然生態系に配慮した公園整備が行われた。本報告では魚類相を対象に、工事前後の種組成を比較し、越流や園内水辺設備整備により魚類相がどのように変化したか把握し、今後の公園管理に寄与する生態学的知見を得ることとした。調査は2005年公園整備前調査に準拠し、遊水地内で籠罟による水生生物採捕を行い、また近接河川における投網採捕を2008年夏季に行った。結果、計3目3科10種を採捕した。遊水地及び近接河川では前回調査との種組成(重要種含む)に大きな変化は無かった。本地は公園整備や越流によっても魚類相の生息環境は維持されていると考えられた。

#### 3. 軽量プラスチック資材を用いた水辺の緑化の取り組み

内田 誠 (日本大学生物資源科学部生物環境工学科)

笹田勝寛 (日本大学生物資源科学部)

島田正文 (日本大学短期大学部)

河野英一 (日本大学生物資源科学部)

都市部におけるヒートアイランド現象を緩和するため、屋上緑化や水辺創出の必要性が高まっているが、実際にはかなりのコストや人手がかかることから研究機関などごく一部での導入にとどまっている。そこで本研究では屋上池における省管理型の緑化資材および管理手法の開発を目的として、屋上という貧栄養条件で生育が可能で比較的手間のかからないコケ植物とそこを生育地とする食虫植物の生育試験を行った。その結果、ミズゴケの生育は良好でハリミズゴケなどが順調に生育し繁茂しているほか、ミズゴケの採取時に混生していたモウセンゴケなどの増殖も確認された。使用した軽量プラスチック

ク資材の耐候性や屋上池による温熱環境の改善という視点での評価も行う。

#### 4. フトンカゴ緑化工法における植物発生材由来植栽基盤の利用可能性の検証

赤池 真 (日本大学大学院生物資源科学研究科)

勝野武彦 (日本大学生物資源科学部)

様々な屋上緑化資材が開発される中、フトンカゴ緑化工法が注目されているが、立体植栽可能な同工法の植栽基盤に関しての知見は少ない。本研究では資源の循環と活用から持続可能な社会に配慮し、フトンカゴ緑化工法における落葉落枝の植栽基盤利用を提案する。植栽基盤には分解落葉 (2005年10月～06年2月落葉、主にケヤキ、コナラ、クヌギ)、未分解落葉 (2006年11月～07年2月落葉、樹種同様)、パーク土壤の3種類で、供試植物ツルニチニチソウの挿し木生育実験を実施。結果、分解落葉、パーク土壤、未分解落葉の順で生育が良く、基盤内における空隙の差が要因であると推察された。よって、落葉落枝を利用した屋上植栽基盤の利用可能性はありと考えられる。

#### 5. 災害避難地の視点から見た名勝庭園に関する研究

待野健太郎 (日本大学大学院生物資源科学研究科)

葉山嘉一・勝野武彦 (日本大学生物資源科学部)

東京都地域防災計画の中で、国指定特別名勝庭園も広域避難場所として指定されている。造園の価値の高い庭園の歴史的・景観的保全とともに広域避難場所としての防災機能を確保することは、高い庭園文化を持ちながら地震の多発する我が国における重要な課題といえる。本研究では、文京区にある六義園を対象に実際の周辺市街地の状況や園内の構造物、面積、地形、植栽、意匠を調査し、過去の震災の事例を参考に避難圏域から避難者数や避難利用の実態を想定した。そして庭園の史跡価値の保全を考慮した避難計画を提案する。

#### 6. 日本とオーストリアの戸外活動比較調査データ

愛甲哲也 (北海道大学)

青木陽二 (独立行政法人国立環境研究所)

異なる気候風土と文化に暮らす人々は、異なった暮らし方をし、考え方をすると考えられる (和辻哲

郎)。今までこれを計量化して測定することはなかった。この研究は様々な環境での人々の屋外活動を測り、人々の環境との関わりの違いを探る。両国は温帯に属すが、オーストリアは冷温帯だけであり、日本は冷温帯から亜熱帯を含む。文化的にはオーストリアは欧州の文化の中心にあり、日本はアジアの東端で中国文化の影響を受けた。日本で19ヶ所、オーストリアでは8ヶ所で、戸外活動に関するデータを収集した。また北海道、茨城、東京では観察やアンケートにより活動の違い、季節感を調査した。結果は解析中だが、各地を代表する4公園の利用者数と気象条件・社会条件の関連分析より、オーストリアでの行動パターンは北海道に似ていた。

#### 7. 東京および神奈川における都市公園内ドッグランの施設ならびに管理の現況

横松広一郎・藤崎健一郎 (日本大学生物資源科学部)

ドッグランは1990年にニューヨークのセントラルパークで発祥し、現在では日本でも都市公園内や民間施設として多数開設されている。日本の都市公園内で最も早いのは、調査範囲内では1996年の千歳市ハヤブサ公園であった。東京では2002年に駒沢オリンピック公園と神代植物公園に開設されている。東京都と神奈川県内の都市公園内ドッグラン9箇所の施設等について調査を行った。面積は1200～5500m<sup>2</sup>、地面は土、ウッドチップ、芝などがあつた。利用時間が定められている所と24時間利用の所にも区分できた。会員制度、大型犬と小型犬の利用場所の区別、水飲み、トイレ、足洗い場、遊具などの施設の有無についても公園ごとの特色が見られた。

## 口頭発表

### 1. 松本市の市街化区域内における残存緑地に対する住民の保全意識

森岡育代（東京大学大学院）

佐々木邦博（信州大学農学部）

本研究では市街化区域内の多様な緑地の残存状態や、それらの緑地に対する住民意識を明らかにすることを目的とする。本研究では個人の宅地を除いた緑被のある場所（田畑、荒地、樹林地、果樹園など）を緑地とした。公園に不満を感じている人は周辺緑地に対する保全意識が大きくなった。従って、他の緑地は公園の質的不足・量的不足を補完する働きを有していると言える。畑地や樹林地などの現状維持が強く求められていることも明らかになった。公園の設置を前提とした上で、畑地や樹林地などの緑地も市街化区域内の構成要素として捉えた都市緑地計画を行っていく必要があると考えられる。

### 2. 林内での経時間における「気づき」の変化について

清水裕子（(NPO) 森林風致計画研究所）

小山泰弘（長野県林業総合センター）

伊藤精悟（(NPO) 森林風致計画研究所）

林内への滞留時間や、来訪を重ねる過程では、人は森林の何かを発見し、気づく。この「気づき」や「発見」のような経験は堆積しつつ森林への接し方を変化させ、森林への親しみや理解の仕方を変えようとする。また、このような時間性を扱うことは、人間にとっての森林の意味を論じるのに、肝要と言える。本研究では、森林内での滞留時間の中で、人が何にどのように「気づき」、「発見」をするのかを捉えることを目的とした。調査方法は、長野県林業大学校生20人を被験者とし、約1時間の林内への滞留時間を20分ごとに区切り、気づいた点や発見した事柄を事前に用意したカードに記入してもらい、その内容を知識、体験、感覚のように分類することで考察した。

### 3. 秋・冬における里地・里山での環境保全活動が与えるリラクゼーション効果とその特性に関する基礎的考察

上原三知（信州大学農学部）

都市住民による里地・里山の環境保全活動の特性とその効果について以下のことが明らかになった。

1) 秋・冬の環境保全の参加により結果的にストレスが軽減し、活気が高まる。2) 秋・冬の里山活動による参加者のストレス軽減量と活気の高まりはともに、体験前のストレスが大きい参加者、活気が低い参加者、若い参加者、新規参加者ほど改善しやすく、参加者数が小規模なプログラムほど、その効果が高くなる。3) ストレス軽減量は自分の子供と参加する場合や、林内活動時間が長いプログラムにより改善される。4) 活気の高まりは、リピーターや、男性、あるいは若い参加者ほど増加し、寒い気温条件下のプログラムほど高くなる。

### 4. 岐阜県恵那市坂折棚田におけるパートナーシップによる棚田ビオトープづくり

相田 明・藤原宣夫・足立健一郎

（岐阜県立国際園芸アカデミー）

本報告は日本の棚田百選に認定されている岐阜県恵那市坂折棚田において、地元（恵那市坂折棚田保存会）・学校（岐阜県立国際園芸アカデミー）・NPO（棚田ネットワーク）の協働による「棚田ビオトープ」づくりの設計・施工・管理について述べる。このプロジェクトは棚田の持つ多面的機能のひとつである生態系保全機能に着目し、NPOがコーディネイターとなり2007年4月から活動を開始した。ビオトープの目標種はヤマアカガエルに設定、休耕田を活用し、3枚（合計面積386㎡、水張り面積合計128.1㎡）に、それぞれ3種類の管理をおこなった結果、成体や卵塊を観察するに至った。

### 5. 戦後福井の緑化運動の始まりとその特色について ―国土緑化推進運動の全国的展開に関する一考察―

市川秀和（福井工業大学）

戦前の昭和9年（1934）に大日本山林会が、神武天皇祭を中心に「愛林日（4/23,4）」を設定し、全国一斉に挙行した「愛林運動」は、終戦前後の中断を経て、昭和22年に結成された「森林愛護連盟」の愛林日・植樹行事へと継承された。かかる戦後の愛林運動復活を踏まえて、昭和25年に「国土緑化推進委員会」創設へと結実し、現在「全国植樹祭」に象徴される盛大な国民運動の基盤が整い、同時に全国各地の自治体による緑化運動へと展開した。本発表で

は、昭和25年からの国土緑化推進運動とその全国への地域的展開をめぐって、福井県の事例から考察した。戦後福井の緑化運動の始まりには、戦災・震災の復興や林業後進県の育成という独特な背景があった事態を明らかにした。

#### 6. 名古屋市における樹木の現状と課題について—「東山の森」と「なごや西の森」を比較して

小林高浩・高崎彰子（株飯沼コンサルタント）

鬼頭 保・滝川正子・眞弓浩二

（なごや東山の森づくりの会）

堀田 守（名東自然倶楽部）

長谷川明子（ビオトープを考える会）

篠田陽作（ネイチャークラブ東海）

林 進（犬山里山学研究所）

名古屋市内の樹林地はその多くが名古屋東部丘陵地にあり、コナラ・アベマキを高木層とする落葉広葉樹林が広く分布している。また名古屋市内では市民の手による樹木管理活動が各地で取組まれ、市民が里山林の植生管理の担い手となる先駆的な都市として広く知られているところである。これまで、名古屋市内の樹林地管理では樹木の間引きによる密度管理と竹類の侵入を抑えることを主眼においた植生管理が多く行われてきた。今回、名古屋東部丘陵地に立地する樹林である猪高緑地「いたかの森」と名古屋西部の人工林である戸田川緑地「なごや西の森」の林分調査を行い相互に比較検証した結果から、名古屋東部丘陵地に見られる樹木の階層構造の特徴が明らかとなり、将来の樹木更新に対する林分構造管理に向けての課題が浮かび上がった。

#### 7. 愛・地球博記念公園における県民協働による管理運営への取り組みについて

速水厚志・則竹登志恵（玉野総合コンサルタント株）

鷺見純良（愛知県建設部公園緑地課）

2005年日本国際博覧会「愛・地球博」の長久手会場跡地（旧愛知青少年公園）で整備中の「愛・地球博記念公園（モリコロパーク）」において、博覧会の大きな成果である「市民参加」を継承する取り組みとして、県民と行政とのパートナーシップによる公園管理運営組織「公園マネジメント会議」の設立に向けた準備が進められている。本発表は、博覧会の理念と成果を継承・発展させるため、NPO、ボラ

ンティア団体、大学、企業、行政などの様々な主体の参画・協働による公園の運営体制づくりに取り組む事例として、この会議発足のきっかけとなった基本計画における経緯と、これまでの取り組みの状況や今後の方向性等を報告する。

#### 8. 景観住民協定を成立させた農村地域における景観と住民評価

毛利文陽・佐々木邦博・上原三知（信州大学農学部）

農村地域において住民が景観を評価する際に、景観の構造的な面、各個人のその景観に接する頻度、居住年数、人足等のその場所への管理活動の有無などにより差異がもたらされるものと考えられる。そこで本研究では、住民が自主的に景観住民協定を結んでいる地区の住民を対象に、『地域景観の定量的評価による類型化した写真』『住民が共同で管理している場所の写真』『ワークショップで得られた住民が良いと評価する景観の写真』を対象としてSD法による評価実験を行い、各住民の、景観住民協定への理解度・満足度、地域への貢献、景観に対する意識との関連性を明らかにした。

#### 9. 名勝指定されている峡谷での観光客の利用に関する基礎的研究

田中 聡・佐々木邦博・上原三知（信州大学農学部）

史跡名勝天然記念物に指定されている、名勝指定の峡谷において、峡谷の地形、構成の特徴を把握し、観光客の意識が、実際にどういった利用動態として表れるかを、アンケート調査およびイメージマップの解析により考察する。調査対象地は、立地条件、散策路の条件、景観構成の条件などから、甲信地方の名勝指定の峡谷である、長野県天龍峡、寝覚ノ床、山梨県御岳昇仙峡の3ヶ所とした。アンケート回収は5月、6月の日曜日で、天龍峡65人、寝覚ノ床69人、御岳昇仙峡79人となった。属性に特徴はなく、他県からの来訪が多い。来訪目的は「自然散策」「風景を見る」が圧倒的で、「歴史・文化」は少ない。指定時の魅力や人文的価値への認識が薄れていることがわかった。

#### 10. 名古屋市におけるNew City Lifeに関する考察

岡村 穰・吉田祐子（名古屋市立大学芸術工学部）

近年、デンマークの首都コペンハーゲンでは日曜

日の歩行者数・自転車ネットワーク・カフェ、レストラン数・イベント参加者数などが急速に増加しており、都市的な楽しみや雰囲気を楽しむための滞在が増えたことが報告されている。本研究では、名古屋市の公共空間について、「保全、快適さ、楽しみ」といった近年の都市住民の要望への充足度について調査し、考察した。また、前報では公園を利用する近隣住民に、公園の印象として13の形容詞句についてそれぞれ5段階評価の回答を依頼したところ、性別や年齢の違いよりも個人間でのばらつきが極めて大きいことが分かった。そこで本報告では、3段階評価を用い検証した。

#### 11. GISを用いた公園管理に関する研究

岡村 穰・加納すみれ（名古屋市立大学芸術工学部）

近年、GIS（Geographical Information System、地理情報システム）を用いた地域分析が盛んに行われている。本研究では、名古屋市域のデジタルマップを用いて名古屋市内の公園の利用頻度を調べる事によって、都市計画公園が適切に配置され、有効に活用されているかを検証することによって新たな都市住民に対する行政サービスの検証法について考察する。公園利用者は自由に水道水を使うことができる。そこで水道使用量が公園の利用頻度に比例するのではないかと判断し、GISソフトARC-GIS9を用いて名古屋市のデジタルマップ上に表示する事によって公園の利用頻度の推定を試みた。

#### 12. 門前町における美しい景観形成実現化調査報告

後藤理絵・井上忠佳（株創建）

本調査は「平成19年度全国都市再生モデル調査」の採択を受け、名古屋市昭和区・八事山興正寺門前町一帯を対象として、地域の関係者とともに美しい景観形成の実現化方策の検討を行ったものである。本調査地区では、その歴史的経過を踏まえた門前町とこれからの地域発展の視点からあるべき姿を共通認識としつつ、当面の方策としては、国、市による景観整備のてこ入れにもかかわらず必ずしも効果を発揮していないことから、地域主体で実施可能な取り組みを模索した。具体的には、ハード・ソフト両面からの景観整備手法や緑化の取り組みによる景観演出手法を提案した。本調査を通じて、地域関係者の景観形成に対する現状意識を高め、実践可能な景

観形成手法を考えるきっかけを与えた。

#### 13. 戦後、森林風致研究再開の背景

伊藤精悟・清水裕子（NPO 森林風致計画研究所）

戦前における森林風致研究は、嵐山の風致施業など実際の山林に適用され、研究、論議も盛んであった。しかし、国民生活の戦中の混乱と戦後の困窮と社会的変動は、森林風致の論議を変質させ、停滞させた。徐々に、森林風致の論議が再開されていくが、その背景には、国民生活の安定により戸外休養利用を回復させ、地方の観光開発による地域振興への期待が増大したこと、資源開発への自然保護運動、国土緑化による森林育成の推進などの社会的動向が考えられる。再開した森林風致研究や論議の目的が、論者の基盤とした背景によって相違しており、戦後再開した森林風致研究の傾向と要因を考察することができる。と考える。

#### 14. 名古屋市の現行土地区画整理事業における既存緑地の保全及び公園計画に関する研究

長谷川泰洋・岡村 穰

（名古屋市立大学大学院芸術工学研究科）

名古屋市で現在施工中の八ツ松土地区画整理事業（以下、八ツ松）では、神社と隣接した公園（神社公園）が計画された。また、諸ノ木南部土地区画整理事業（以下、諸ノ木南部）は、風致地区指定地域の区画整理事業である。本研究はこの2事業の関係者（施工者・区画整理組合員）へのヒアリング調査により、土地区画整理事業における既存緑地と公園計画との関係について調査した。八ツ松では、神社の隣接地が急傾斜地で宅地として使いにくい土地であること及び自然林の保護から神社公園が整備された。諸ノ木南部では、当初2つの公園計画があったが、行政の規制緩和により既存の池を活かした1箇所公園整備とした。

#### 15. 名古屋城外堀ヒメボタルの連夜調査の報告

岡村 穰・長谷川和紀（名古屋市立大学芸術工学部）

従来、山岳部のみ生息すると言われているヒメボタルが、1975年に名古屋市中心部にある名古屋城の外堀りで発見されて30年余りが経つ。近年は一般人の興味も薄れて観察に訪れる人の数も減少するとともに、ヒメボタルの発生数も急激に減少している。

本報告では、ヒメボタルの生息地の保全及び再生を図りつつ、一般市民が良好な時間帯及び環境で観察できるようにするための基本調査として、発生日から終了日までの毎夜各時間ごとのヒメボタルの発生数及び観察者数の推移について調査した結果を報告する。更に、調査結果からより良い観察のための空間デザインについて考察した。

#### 16. 河川堤防におけるツメレンゲとクロツバメシジミの生息状況と外来植物による影響

坪井勇人（信州大学大学院農学研究科）

大窪久美子（信州大学農学部）

天竜川水系の河川敷には準絶滅危惧種のツメレンゲと本種を食草とする準絶滅危惧種クロツバメシジミのハビタットがある。同所には特定外来生物オオキンケイギクが優占し、両種の関係性に影響を与える恐れがある。本研究の目的は両種の保全の観点から、生育地の周辺群落、立地環境、生息状況の関係性を解明することとした。ツメレンゲ生息域でのクロツバメシジミのルートセンサス調査では、クロツバメシジミ成虫はのべ129個体、ツメレンゲ地上シュート数は18,683が確認された。植生調査、環境条件調査の結果、ツメレンゲ生育地へのオオキンケイギク等の侵入は相対光量子密度を低下させ、両保全種のハビタットを衰退させることが示唆された。

#### 17. 野辺山高原におけるサクラソウ湿生群落の3年間の植生遷移

佐野恭子（信州大学大学院農学研究科）

大窪久美子（信州大学農学部）

本研究は野辺山高原の準絶滅危惧種サクラソウを含む湿生群落保全の植生管理を検討するため、3年間の植生遷移と立地環境との関係を解明することを目的とした。調査は2004年に36プロット（4㎡）を設定し、同年6月と2007年7月に植生及び立地環境調査、秋季に毎木調査を行った。TWINSPAN解析の結果、プロットは4群落型、出現種は5種群に分類され、A,C群落型はサクラソウを含む種群で特徴付けられた。全群落型で乾燥化指標であるミヤコザサと、クロツバラハンノキ群集の標徴種であるクロツバラ等が増加し、特にCとA群落型で顕著で遷移度が増加した。土壌含水率の傾向は変わらず、相対光量子密度は全群落型で低下した。

#### 18. 里山再生への取り組み

丸山 昇・日比野美香（株創建）

生物多様性の確保が重要課題となっている今日、「里山」の保全と再生の取り組みが各地でなされている。西尾いきものふれあいの里、荒池緑地、平和公園南部地区などを事例として、「里山再生」の視点から計画、設計のポイントなどを考察する。

#### 19. 屋上緑化における適応植物と土壌条件

中村若菜・景井 厚・瀧川悠人・小野天下

（株豊造園、株土屋組）

屋上緑化はヒートアイランド現象の緩和に有効とされ、公共をはじめ、会社社屋、一般住宅などにも、多く取り入れられるようになった。しかし、屋上という、植物にとって特殊な環境下においては、地上と同じ植栽方法は通用しない。直射日光、保水、排水、土壌の厚みなど、植栽するにあたっては考慮しなければならない条件が多い。また、建物内の温度を下げるという機能を重視した緑化だけでなく、屋上庭園として美観を求める場合においては、維持管理も重要となる。そこで、社屋兼社員寮の屋上を使って、植物の成長と環境条件を測定し、屋上に適する植物や成長条件について考察した。

#### 20. 立体的造園園芸手法～モザイクカルチャー

小林天竜・吉田 敦

（日本造園建設業協会中部総支部）

2009年9月19日から66日間の会期で静岡県浜松市で開催される浜松モザイクカルチャー世界博2009に向け、浜松駅前において宣伝用ディスプレイ作品の製作に携わった経過を紹介する。モザイクカルチャーは、鉄骨とワイヤーフレームで表現する造形物の躯体を作り、その表層部に植栽基盤となる土壌を詰め込み、そこに草木を植え込み作品とする技法である。19世紀、ヨーロッパで発達、現在カナダに協会本部を置き浜松博で4回目となる世界博を開催する事になる。その魅力について報告する。

#### ポスター発表

##### 1. SD法による玉石積み擁壁の景観評価試験

藤原宣夫・相田 明（岐阜県立国際園芸アカデミー）

木曾川中流域に産出する玉石は、擁壁材料として

沿川地域で使用されてきたが、近年ではコンクリート等の他の材料が多用され、地域の特徴的景観が失われつつある。本試験ではSD法により玉石と他の材料の擁壁の景観を比較し、地域の景観要素としての玉石積み擁壁の評価を試みた。評価試験は25枚の景観スライド（うち玉石8枚）を用い、52名（うち木曾川中流沿川地域出身者20名）に対し実施した。その結果、玉石積み擁壁はコンクリートや切・割石に比較し、自然性・デザイン性において高く評価されたが、「田舎っぽい」とされた。また、沿川地域と他地域の出身者として比較すると、他地域出身者により、「住みやすさ」「快適さ」において高い評価が与えられた。

## 2. 英国BTCVにおける秋・冬季の環境保全活動のプログラム特性とその類型に関する基礎的考察

上原三知（信州大学農学部）

英国BTCVが企画・実施する秋・冬の環境保全活動の特徴を分析し以下が明らかになった。1) 観光のオフシーズンである6ヶ月に延べ308日の活動が実施される。2) 直接的にBTCV企画の活動は5%にとどまるが、Country park, Country council, Private landownerなど47の団体、組合による企画の窓口とリーダーの派遣を担っている。3) 活動内容はHedging25%、Woodland23%が多いものの、Habitat Workや、Accessの改善など多様なメニューが企画され、私有地から自然保護委員会指定の科学的重要地区（SSSI）までの環境が活動対象となる。

## 3. 四賀クラインガルテン事業における受け入れ側の意識と評価—田舎の親戚（パートナー）制度登録者と地域住民との意識の違い

京谷昭利・佐々木邦博・上原三知（信州大学農学部）

近年、団塊の世代の定年退職者を中心とした都市住民による農山漁村への中長期的滞在のニーズが高まっている。松本市四賀区では、平成6年から遊休荒廃地対策と都市と農村の交流を目的としたクラインガルテン事業をスタートし、一区画につき地元の方が一人ずつ農業指導等のサポートをする「田舎の親戚制度」という独自の制度によって毎年高い人気を誇っている。そこで本研究では、これまであまり取り組まれていなかったパートナーと地域住民の意識の違いについて重点を置き、その課題点を整理し

た。

## 4. 高遠城址公園の利用実態から探る観光客誘致の課題

中村由佳・佐々木邦博・上原三知（信州大学農学部）

長野県伊那市高遠町にある高遠城址公園は、国指定文化財である史跡・高遠城跡を中心に整備された公園であり、桜の名所として知られている。そのため、桜の時期には県内外から多くの観光客が訪れる。しかし観光客は桜の時期に集中しており、年間を通じての観光客の誘致が求められている。そこで本研究は、桜の時期以外に高遠城址公園に訪れた観光客を対象に、訪れた理由と目的、良かった点、改善点、満足度などについてアンケート調査を実施し、集客の課題を明らかにすることを目的とする。

## 5. 長野県上伊那地域の集落景観における樹林の形態と配置特性

長尾圭悟・上野優貴・出羽澤智美

佐々木邦博・上原三知（信州大学農学部）

集落景観は地形や気候などの自然条件、歴史や信仰、産業や生活などの文化的背景の影響を受けて成立する。集落景観のこのような性質は、画一化の進む日本の里山景観において地域性を示す重要な要素である。本発表では、長野県上伊那地域を対象地として、戦前から続く伝統的な農村集落における樹木や樹林の、集落内における分布や立地環境、樹種や形態を調査し、対象集落の有する地域性を探る。また、多くの河川が流れ複雑な河岸段丘地形を形成し、山林とも接する多様な地理条件にある本地域の特性を活かし、異なる環境の集落ごとの比較を行い景観の差異を明らかにすることで、集落ごとの地域性をより深める。

## 6. 自然体験プログラムに参加した都市部の子ども

たちとその両親のアンケート調査による活動評価

田代 匠・佐々木邦博・上原三知（信州大学農学部）

都市域に多くの人口が集中している現代社会においては、子どもたちの身近で遊ぶことのできる自然環境は非常に限定された状況にある。そのような中、長野県伊那市高遠で行われている「NPO自然学校ふるさとあったかとお」の自然体験プログラムには東京、名古屋より沢山の子どもたちが集まっている。

本研究は、「あったかとお」による自然体験プログラムへ参加した子どもとその保護者の参加目的、活動評価を明らかにするためアンケート調査を行った。夏休みの7月29日～8月1日に行われた「サマーカーンプ」に参加した子どもとその親34人に対しアンケート調査を行い、得られた14人の子ども、保護者の評価を報告する。

## 7. 森林公園における高齢者の利用に関する基礎的研究

張 桐 (信州大学大学院農学研究科)

佐々木邦博・上原三知 (信州大学農学部)

少子高齢化が急速に進んでいる日本において、65歳以上の人が人口全体に占める高齢化比率は20%を超えて、非常に高くなってきた。高齢者において森林公園の利用というニーズが増加してきたことがうかがえる。そこで本研究は森林公園である長野県赤沢自然休養林において、森林公園の形態とその現状、そして整備方針を調べた上で、高齢利用者の訪問動機、行動を把握し、高齢者にとっての公園内の問題点とその原因を探りながら森林公園の魅力と価値を明らかにする。

## 8. ガリバーマップを用いた児童の遊び場の現状調査—長野県伊那市の農村を対象として

高井 緑・佐々木邦博・上原三知 (信州大学農学部)

農村に住む児童の遊び場について、児童の性別や学年との関係と空間の特性に関する分析を行った。調査は長野県伊那市西箕輪地区の森林や川、農地、公園など多様な土地利用が見られる3集落を選定し、そこに居住する児童に対してガリバーマップを用いたアンケートを実施した。アンケートの質問項目は性別、学年、住居の位置、通学路、普段遊ぶ場所、そこで遊ぶ遊び、保護者や学校の先生から遊ぶことを禁止されている場所などである。児童一人当たりの遊び場数は全体で2つ未満であり、性別では男子の値が大きく、学年別では、中学年の値が最も大きく、1年生と6年生で小さいという結果が得られた。

## 9. 庭園公開の参加者による城下町と武家屋敷庭園の評価とその経年変化—長野市松代町の「お庭拝見」におけるアンケート調査より

兼井聖太・佐々木邦博・上原三知 (信州大学農学部)

長野市松代町は、真田藩の城下町である。現在でも町割り、街並みの多くが当時のままで残されている。また泉水路、セギ、カワに分類される水路網が城下町全体に残されている。これは全国でも松代町にしか見られない特徴である。そこで本研究では「お庭拝見」という個人の庭を公開する企画の参加者に対して2002年から2008年までの6年間合計9回のアンケート調査を行った。それらについて開催年、季節及び参加回数の違いにより城下町と武家屋敷庭園に対する評価の差異を把握することを目的として分析を行った。

## 口頭発表

## 1. 中国庭園における「借景」の史的研究—黄庭堅『山谷集』を中心に—

李 偉 (国際日本文化研究センター)

「借景」は庭園空間を創造するための一手法であり、人々の視覚観賞を満足させると同時に、その時代の文化や庭園作りの背後に潜む自然観をも反映している。先行研究では、「借景」という言葉が中国の造園書『園冶』（1634年）の中に初めて登場したとされてきた。しかし、「借景」はその500年前に、北宋時代の詩人である黄庭堅（1045-1105）の『山谷集』に既に用いられていたのである。本研究はまず『山谷集』に記述された「借景」の意味を分析し、『園冶』以前に使われた「借景」という言葉の実例を考察する。さらに黄庭堅の詩文の特徴と関連付けながら、「借景」を出現させた北宋時代の思想的、文化的背景を追跡する。

## 2. 『无上法院殿御日記』にみる近衛家本邸庭園の普請と利用—近衛基熙当主期

町田 香 (国際日本文化研究センター)

本稿では、「无上法院殿御日記」をもとに、近衛基熙当主期の近衛家本邸庭園の普請と利用状況の一部を紹介し、宮庭庭園の特質を考察した。基熙が庭の普請を行う時に必ず相談していた交野公心は、修学院離宮の造営にも関わっており、この時期の宮廷の中で最も建築や作庭に秀でた人物といえる。近衛家の主庭園は「表の庭」と呼ばれ、現在の園池にあたる部分と推定される。近衛家の庭園は、後水尾法皇の御幸時や、季節ごとの接客、日常の憩いの空間として主に機能していた。御茶屋で食事をし、物見格子から市井見物をし、庭園で花を愛でたり、舟遊びをするなどが当時の宮庭庭園の利用の典型で、近衛家の物見格子は寂びた山里風の御茶屋であった。

## 3. 「太梁公日記」に記された兼六園庭園・翠滝の滝音に対する前田治脩の作庭指示

栗山伴芳・曾和治好 (京都造形芸術大学)

兼六園の翠滝は、その作庭において視覚的・物理的な工夫とともに「音」に対しても配慮されていたことが、指示を行った加賀藩11代藩主前田治脩の自筆日記「太梁公日記」に記されている。また、後に

拝見を許された家老の記述によると、その音は「鼓の如く苑中に満てり」と表現された。これらは江戸時代の庭園における、作庭時の滝音への配慮を示しており、当時の作庭意図と音の関係性を明らかにするための記録として貴重である。さらに日記からは、治脩の音に対する感性や、同敷地の音環境の構造に対する理解がうかがえ、彼の求めた音空間の諸相について推察することができる。

## 4. メナージュリーの二つの流れ

若生謙二 (大阪芸術大学)

メナージュリー (menagerie) とは、中世以降に王侯の城郭や、地方領主らのパークに設けられた動物展示施設、また見世物としての移動動物園の展示施設をさすものであり、19世紀に動物園 (zoological garden) という用語が確立するまでに開設されていた動物展示施設に対して、欧米で用いられてきた用語である。本稿では、メナージュリーの歴史的概要を把握し、そこには狩猟の道具としても用いられた肉食動物や大型動物を城郭の一角に収容したものと、パークを起源として生まれた庭園に、主に狩猟の対象となる草食動物を装飾的に配しものとの、二つの流れがみられたことを明らかにした。

## 5. 英国における日本庭園紹介の取組

福原成雄 (大阪芸術大学)

2003年～2008年の6年間、英国のタトンパーク、キューガーデン、日英協会、ジャパニーズガーデンソサエティーにて、日本庭園の歴史、様式、技術の坐学と、小規模庭園の設計、施工の紹介講座を行ってきた。その内容と英国の人々が日本庭園に対してどのように考えているのかを紹介する。

## 6. 戦中・戦後の愛林運動と「植える」ことの意味

市川秀和 (福井工業大学)

戦後日本の荒廃した国土復興を目指した「国土緑化運動」は、天皇陛下のご臨席による「全国植樹祭」に象徴される一大国民行事を中心として、現在では広く知られて定着するに到り、来たる2009年には第60回 (福井県会場) を迎える。これはそもそも、戦前の昭和9年から大日本山林会が中心となって全国一斉に挙行開始した「愛林日」という国民的な植樹運動が、直接の発端である。戦前の愛林運動につい

ては、石川県を事例にして既に報告した。そこで本発表では、昭和20年の終戦から昭和25年に開始された国土緑化運動に到るまでの約5年間において、この期間の活動母体であった「森林愛護連盟」による「愛林日」復活を取り上げ、戦中期「愛林運動」との関係と比較考察するものである。

## 7. 自然葬地のデザインに対する評価構造に関する研究

武田史朗（立命館大学）

吉田悠佑（立命館大学大学院）

わが国において今後自然葬地が計画される場合の計画に対する評価構造の一端を明らかにすることを目的とし、樹林地型や草地型、湿地型などの異なる景観タイプをベースとした自然葬地の計画タイプを表す模式図に対して、「総合評価」の他に、既往研究から得た知見をもとに仮説として設定した「個人」、「公共」、「空間もしくは景観としての自然」、「自然環境」という4つの潜在変数の下位項目に対応する項目を含む評価項目についてアンケート調査を行い、その結果に対して共分散構造分析を適用することによって、4つの潜在変数を用いた評価構造モデルの仮説を検証した。結果、仮説が検証されると共に、いくつかの自然葬地の計画上の課題が抽出された。

## 8. 自然葬地のデザインに対する「墓地」と「緑地」の二面的価値に着目した評価構造に関する研究

武田史朗・吉田悠佑（立命館大学）

本研究では、日本国内における自然葬地の計画を行う際に考慮すべき課題や条件を明らかにするために、東京都内のニュータウンの住民を対象に異なるタイプの自然葬地の計画をあらわす模式図の評価に関してアンケート調査を行い、その結果を共分散構造分析によって解析した。結果、「墓地」と「緑地」の二つを潜在変数とした評価構造モデルの適合性が確認され、計画の総合的な評価に対して両者が同程度の直接効果を有することがわかった。また「墓地」としての評価においては敷地が気軽に立ち寄りやすい計画となっていることが重要な評価要因であることや、「墓地」と「緑地」としての要求に相反する側面があり、この解決にデザイン的な処理が有効に働くことも明らかとなった。

## 9. グリッド状に樹木が配置された独りで居やすい景観の構成に関する研究 ～「けやきひろば」を対象敷地として～

小嶋咲紀・武田史朗（立命館大学）

本研究はグリッド状の樹木が空間の骨格となるよう構成される「けやきひろば」を対象とし、ベンチに座った時の独りで居やすい景観の特性を印象評価分析と景観構成分析を通して明らかにすることを目的とした。10人の被験者にベンチごとに最も独りで居やすい向きと、各アングルにおける評価を尋ね、評価の高いアングルを写した21枚の画像を用いて30人の被験者を対象に印象評価分析を行った。因子分析の結果、因子上の特性が明確な4グループにおいては、それらが類似した要素をもつ景観によって構成されていることがわかった。またグリッド状の樹木は他の景観要素との組み合わせで景観の特性をつくることに寄与していることがわかった。

## 10. ワシントンDCナショナルモールにおける全体性と個別性の両立手法に関する研究

渡瀬育馬（NAP建築設計事務所）

實方華子・武田史朗（立命館大学）

メモリアルには、不特定多数の人々の想起媒体としての公共性と、遺族の人々の追悼の空間としての個別性という2つの矛盾した性格が求められる。本研究ではワシントンDCのナショナルモールにある7つのメモリアルを対象として、全体性が強く意識づけられる空間の中で、どのようにして個別な記念内容を伝える空間がつくられているかに関する設計手法を抽出することを目的とした。景観展開の図式化には、E. Caseyの「場所的記憶」の概念に基づいた「場所」の図式化方法を用い、現地調査の結果から枠組み構成要素を抽出した。各図式の比較分析をすることで、全体性と個別性を実現する設計手法を抽出できた。

## 11. インドネシア・ジャカルタにおける屋外空間の利用実態について

依藤智子・田原直樹・客野尚志・山崎義人

（兵庫県立大学）

本研究では、都市の近代化が進むインドネシアにおいて地域の生活様式に合った住宅を再検討するため、テラスを中心とした住宅に付随する屋外空間に

注目し、その利用実態及び空間構成を把握することによって屋外空間の役割を明らかにし、今後の住宅地計画に資する知見を得ることを目的とする。ジャカルタ大都市圏内のデポック市において開発背景の異なる3つの住宅地においてデザインサーベイ及びヒアリング形式のアンケート調査を行い、空間構成及び利用方法、フェンスの役割に着目し考察を行った。その結果、私的な利用から公的な利用まで多様な利用方法が見られた。フェンスは、各地区ごとに違った役割を果たしていることが分かった。

## 12. 南洋諸島に見る伝統的建築-パイ-の環境に及ぼす影響

狩野忠正（大阪芸術大学）

南洋諸島の伝統的建築物-パイ-は村のシンボルである。パイを建築する人は「森の番人」と云われ尊敬されている。パイの使用目的は政治を語る場、集会場、練習場である。パイは釘を一本も使わない。施工精度は高く、プレハブ工法であり、解体、移動が簡単である。パイが建つ環境は一段高い玄武岩の上であり、アプローチには自然石が敷詰められている。経路空間を重要視している。

## 13. 緑化との関連でみたコンクリートからのアルカリ成分の溶出について

岡本紘典・前中久行（大阪府立大学大学院）

都市部においては植栽基盤である土壤の周囲はコンクリート製品によって取り囲まれ、アルカリ物質の付加で酸性土壤からアルカリへの移行が植生に影響を与えることが懸念される。本研究ではコンクリートからのアルカリ分の溶出に着目し、溶出状況の把握を目的とした。市販赤玉土をコンテナに詰め、コンクリートブロックを設置し、ブロック周辺土壤のpHの日変化を測定した。また、水道水を満たしたポリバケツにブロックを沈め、pH変化を測定した。コンクリートブロックの近くで土壤pHは上昇し、湿润状態の土壤でpHの変動が見られる傾向があった。また、水中ではpHの上昇は早い段階で起こり、以後は緩やかに低下する傾向が見られた。

## 14. 種々の舗装材を用いた屋外グラウンドの夏季暑熱環境の比較

入船嘉之・山田宏之（和歌山大学）

2008年の夏季日中に、大阪府吹田市の万博記念公園内の舗装材にロングパイル人工芝、天然芝、真砂土が使用された3種類の屋外グラウンドにてWBGT値、地表面温度を同一時刻に連続測定し、暑熱環境の差異について比較・検討した。その結果、夏季の典型的な晴天日においては、人工芝区、真砂土区、天然芝区の順に熱中症の危険性が高い状態である事が確認された。一方、夏季のピークが過ぎ、雲によって断続的に日射が遮られた日には、真砂土区、人工芝区、天然芝区の順に強い暑熱状態である事が確認された。WBGT値の算出要素別に比較した結果、相対湿度については天然芝区が両日とも最も高い状態で推移しているにも関わらず、WBGT値は最も低い水準であった。

## 15. 芝生化駐車場の景観評価と表面温度特性

遠藤裕志・山田宏之（和歌山大学）

現在、都市緑化の新たな方法として駐車場の芝生化技術が注目されている。これまでに、アスファルト駐車場を芝生化することで、表面温度低減効果や景観向上効果が期待出来ることが明らかにされている。本研究では、これらの効果と芝生の生育状況との関係性を明らかにすることを目的として調査を行った。その結果、芝生化駐車場における最重要景観要素は緑被率であり、50%を下回ると景観向上効果が期待出来なくなり、40%を下回るとアスファルト駐車場よりも評価が低くなることが明らかとなった。また、緑被率が50%を下回るとコンクリート面と同程度、裸地化するとアスファルト面と同程度の表面温度となることが明らかとなった。

## 16. 地上型レーザースカナを用いた庭園の景観シミュレーション

早瀬真弓・今西純一（京都大学）

中村彰宏・戸田健太郎（大阪府立大学）

森本幸裕（京都大学）

地上型レーザースカナは、短時間でかつ正確に対象物の3次元座標を測量することが可能な測量機器であり、現在様々な場面で利用されている。本研究では地上型レーザースカナを用いて、名勝清風荘庭園における京都東山の借景の復元に関する景観シミュレーションを行った。シミュレーションから得られた結果は、近隣の高い建築物への視線を遮蔽

しつつ、東山への眺望を阻害していた樹木を切り下げる際の資料として有用であると考えられた。さらに、庭園周辺に現在の京都市の都市計画で許容されている高さの建築物が建てられた場合、庭園からの眺望景観にどのような影響があるかの検討を試みた。

#### 17. 神社境内地におけるヒメボタルの生息環境特性に関する研究—泉南市男神社を事例として—

北村 新・上甫木昭春 (大阪府立大学)

ヒメボタルは、ゲンジボタル、ヘイケボタルと同様に成虫が発光する種類である。しかし、前者2種類と比べヒメボタルに関する研究は少なく不明な点も多いため、保全活動の方法が定まっていない。そこで本研究では、神社境内において幼虫期を含むヒメボタルの生息環境特性の違いを把握することを目的とした。調査の結果、ヒメボタルの成虫は地表面が落ち葉で樹冠が多層であるところに多く分布し、幼虫、オカチョウジガイ類の生息域とほぼ同じであることがわかった。このことから、ヒメボタルの生息環境保全には、幼虫が捕食すると考えられるオカチョウジガイ類が生息していく環境を保全することが重要であると考えられる。

#### 18. 風の道・生き物の道による環境まちづくり

上田正敏・合田 寛 (大阪市)

大阪市の平均気温は、この100年間で約2度上昇しており、ヒートアイランド現象の影響で1度、地球温暖化の影響で1度上昇していると言われている。大阪市には、西に位置する瀬戸内海から日中を中心に涼しい海風が吹くことから、臨海部の気温は、内陸部に比べて低い傾向にある。そこで、大阪市では、臨海部から内陸部に東西に続く河川や幹線道路を、水と緑豊かな都市軸として再生し、ネットワークすることで、西から吹く涼しい海風を内陸部まで運ぶ風の通り道となる“風の道”の整備に向けた調査研究に着手する。この“風の道”は、豊かな生態系を持つ生駒山系まで繋げることで、都市の生物多様性にも資する生き物の道としても期待される。

#### 19. 大阪市夕陽丘地区の緑景観と保全制度との関連性に関する研究

稲田有香子・加我宏之・下村泰彦・増田 昇

(大阪府立大学)

上町台地特有の緑景観の保全に対して法制度(風致地区制度及び都市計画公園制度)が与えた影響を土地利用とともに視覚的に明らかにすることによって、今後の緑景観の保全に向けた課題を探った。その結果、緑被地や緑の視認性の保全に対して風致地区制度や都市公園の計画制度が一定の役割を果たしていることを明らかにし、さらに、夕陽丘固有の斜面林の景観を保全・活用するためには、周辺からの緑の視認性を考慮した新たな景観法の活用や斜面林の育成・拡大を図るための新たな緑化施策等の重要性を示唆した。

#### 20. 多自然居住地域での限界集落における集落移転に関する研究

木本一宏・赤澤宏樹・嶽山洋志・中瀬 勲  
(兵庫県立大学)

現在、多自然居住地域の小集落における限界集落化が進み、過疎地域の新たな意義・役割の必要性が求められている。今発表は、過去1970年代に過疎対策の一環として実施された集落移転事業を顧みて、現在の多自然居住地域において主に人口減少、著しい高齢化によって限界集落化が進み社会共同体としての機能維持が困難な集落を移転・再編することにより、地域として持続可能なものとするを目的としている。その際の住民の生活への影響を最小限にし、早期のコミュニティ形成を可能とする事業のあり方とコミュニティに求められるもの、そして国土保全の観点から跡地集落の管理方法を明らかにする。いうならば「集落のたたみ方」の発表である。

#### 21. 中之島コミュニケーションカフェの取り組み

花村周寛 (大阪大学)

(300字要旨提出なし)

#### 22. コミュニケーションとしてのランドスケープ～天若湖アートプロジェクト

下村泰史 (天若湖アートプロジェクト実行委員会)

毎年夏に京都府南丹市で開催される「天若湖アートプロジェクト」のメインイベントである、ランドスケープ・インスタレーション「あかりがつなく記憶」を紹介するとともに、ランドスケープづくりへのアーティスティックなアプローチが開く、市民間

の新しいコミュニケーションの可能性について考える。

### 23. 小学生向け景観教育ツールとしてのワークブックの提案 ～美しい風景のことはじめ～

中川郷子 (もくや)  
曾和治好・水野哲雄 (京都造形芸術大学)  
山崎 亮 (studio-L)

日本の環境教育において環境保全や自然学習の教材は充実しつつあるが、「美しい風景」を創り出すための教材についていえば、ごく限られたものとなっている。そこで、小学生向けの景観教育の教材を開発することによって、風土に合った「美しい風景」を求める心を初等教育を通じて育むことはできないかと考えた。風景・景観を五感で味わい、こども時代に感じ取ったことを手元に蓄積し、自身の財産としていくことの出来るように、『美しい風景のことはじめ』と名づけてワークブックを作成し、小学生を対象にしたワークショップを開催した。これらの中で一定の成果は認められたが、さらなる内容の充実と継続的な展開を今後の課題と考えている。

### 24. 東横堀川の変遷とイベント利用から捉えた空間整備に関する研究

大栗 大 (鳳コンサルタント)

下村泰彦・加我宏之・増田 昇 (大阪府立大学)  
東横堀川の利用や空間形態の変遷と近年水の回廊で実施されているイベントの成立要件を明らかにし、水辺整備の方向性を探った。その結果、東横堀川において水辺でのイベントを活性化させるための要件として、空間的仕組みでは、陸側でベンチやテーブル、水上の台船へアクセスするタラップといった付加的装置を導入し、水辺での滞留空間の創出や水面へのアプローチを容易にすること、社会的仕組みでは、沿川の公共空間の占有や使用許可を獲得し、活動範囲を河川区域まで広げることや船舶の運航を自由にする、活動形態の仕組みでは、公民共同開催によりイベントを多様化、大型化させることを明らかにした。

### 25. 京都府木津川市鹿背山地区における1880年代以降の土地利用の変化

岩佐匡展・深町加津枝 (京都府立大学)  
堀内美緒 (京都大学・日本学術振興会特別研究員)  
奥 敬一 (森林総合研究所関西支所)

三好岩生 (京都府立大学)

歴史的に古くから大都市近郊に位置する里山集落である京都府木津川市鹿背山地区を対象に、1880年代以降の土地利用の変化を、地形図と空中写真の判読による数時期の土地被覆図の作成、および文献調査や住民への聞き取り調査をもとに明らかにし、各土地利用間の推移を分析した。その結果、陶磁器生産、割木や柴の商品化、商品作物栽培など、大消費地との経済的関係による生産活動の変化に伴って、商品価値の高い果樹の大規模な植栽や、林地を拓いた畑地の再樹林化といった多様な形態での土地利用の変化が見られた。里山としての一体性を保ちながらも、外部との経済的関係に強く影響される大都市近郊の里山の土地利用の変化過程を示した。

### 26. 1層または2層構造のフェンスへのテイカカズラおよびムベの登攀特性

下村 孝 (京都府立大学)  
岡田準人 (神戸芸術工科大学)  
大塚恭平 (四国化成工業)

2層構造に仕立てたダブルメッシュフェンスを用いて、ムベおよびテイカカズラの主茎を残した株(主茎区)と主茎除去後に生じた分枝を利用した(分枝区)の登攀特性を調べた。写真画像を用いて測定した緑被率は、テイカカズラでは主茎区と分枝区には有意な差はなかったが、ムベでは分枝区が主茎区を有意に上回り、頂芽を除去することが被覆率向上に有益であった。テイカカズラをダブルメッシュフェンスおよびシングルメッシュフェンスに登攀させて被覆性能の違いを見た。その結果、1層構造のフェンスでは、ダブルメッシュフェンスに比べ、被覆率が劣り、2層構造のフェンスは巻き付き型つる植物による緑化には有効であると考えられた。

### 27. 根系切断による樹形コントロールに関する一考察

渡邊英一・大藪崇司 (淡路景観園芸学校)  
吉田早織 (京都市)  
澤田佳宏 (淡路景観園芸学校)  
橋本啓史 (名城大学)

山本 聡・藤原道郎（淡路景観園芸学校）

樹木の旺盛な成長は、越境や架空線との競合といった問題を引き起こす。これらの問題解決として実施される剪定は、樹木が持つ本来の樹形を乱し、樹木形態の面から見て好ましい状況とはいえない。そこで本研究では、根系切断が樹木の成長に及ぼす影響を検証し、樹木が持つ本来の樹形を維持しながら管理できる手法の開発を目指した。研究方法は、4年生のハナミズキとエンジュ各40本を対象樹種とし、各樹種20本に根系切断の処理を施し、2008年5月から10月までの成長量を比較した。その結果、根きりあり・なしで有意な差は認められないものの、根切りを実施した群において成長量の抑制が確認された。

## 28. 街路樹に対する一般市民と沿線住民との評価の比較—京都市を事例に—

橋本啓史・近藤真弓（名城大学）

渡邊英一（淡路景観園芸学校）

大藪宗司（兵庫県立大学大学院／淡路景観園芸学校）

京都市の緑化イベントにおいて、来場者した市民に対して市内の街路樹の樹種や管理に関するアンケートを実施し、緑陰をつくる高木、色づきのある花木、季節を感じる街路樹が好まれていることが判った（回答数398件）。この結果を受けて、イチョウとケヤキが中央分離帯と歩道の両方に植栽されている路線、ハナミズキの路線、サクラの路線、行政が問題と感じている生育の悪いイヌエンジュの路線、の計4路線において、沿線住民に対してアンケートを行い、60件の回答を得た。一般市民の評価と比較した結果、沿線住民は一般市民と同様の樹種嗜好であったが、清掃等の管理に関して行政や近隣住民に対しての具体的な意見を持っていることが判った。

## 29. 大阪府営公園におけるデータベース化による管理運営について

柏原一凡（大阪府公園協会）

今後の公園管理においては、利用者の安全性の確保、利便性の向上、管理水準の向上などに加えて、さらなる維持管理費の縮減など、これまで以上に効率的・効果的な管理運営が求められている。当協会では、長年の府営公園での管理実績を活かし、平成16年から公園日報等の管理運営情報のデータベース

化に着手した。現在、14の府営公園で、表計算ソフトとGISソフトによる管理運営情報のデータベース化を行い、データの分析・評価を通じて、管理運営上の課題の整理・改善を図っている。今後とも、利用実態に応じた園内清掃や草地管理の実施、事故の未然防止のための適切な補修修繕、コスト縮減など、さらなるシステムの充実と活用を進めていく。

## 30. 遊具事故ゼロ計画に基づく遊具リスクマネジメントの実践—財団法人大阪府公園協会の取組み—

永井英樹・三尾尚己（環境設計）

陣門泰輔・勝山慶一（大阪府公園協会）

中橋文夫（環境設計）

大阪府営公園全18公園のうち14公園を管理する（平成20年10月現在）財団法人大阪府公園協会では、平成16年度より「遊具事故ゼロ」を目標に掲げて、「情報管理」、「品質管理」、「利用管理」の3つの柱からなる総合的な遊具リスクマネジメントに取り組んでいる。その具体的内容は、遊具管理システムの整備（情報管理）や、職員の遊具点検技術の向上を目指した遊具安全点検技術講習会の開催（品質管理）、遊戯場・遊具利用実態調査による利用者の利用状況の詳細な把握や、紙芝居を用いた遊具安全利用啓発（利用管理）である。財団法人大阪府公園協会では、こうした草の根的ではあるが、総合的な取り組みである「遊具事故ゼロ計画」を現在進行形で推進している。

## 31. 第23回全国都市緑化おおさかフェア会場「林のゾーン」

吉田・駒井（空間創研）

後藤（総合計画機構）

中田（ナカタ空間企画）

近藤（リアライズ造園設計事務所）

永石（景観設計研究所）

久保（スタジオアーバンスペースアート）

山本（環境緑地設計研究所）

全国都市緑化おおさかフェアの主会場である「林のゾーン」は、昭和40年代、大阪市民の寄付により整備された植栽林で、大阪市内では大木が林立する希有な「森」の1つでもある。この特性を活かし、市民による森をさらに昇華させた「華の風景林」を目指して同時期に開花する中高木－低木－草花の花

の競演による百花繚乱の新しい花の景と、市民参加による美しい林の風景を提示し、さらに草花に蔽われた建築や、樹林と一体となった水辺等、環境共生空間、自然再生空間等をも提案した。なお、会期中は、空の庭が特徴的なエコホールを中心に、パネル展示による自然再生技術の紹介や、市民参加イベントで好評を得た。

### 32. 千里ニュータウン緑の保全活用計画アイデア募集

中橋文夫（環境設計）

千里ニュータウンの緑は、建設から46年経った今日、立派に成長したが、老朽化した住棟の建て替えのため、緑が失われる危機に瀕している。そこで、これらの緑を守り、今後どのように活用していけば良いのか、そのアイデアを募集する。ニュータウン内に残された緑は公園緑地、住棟回りの園地、周辺の残存緑地など、その形態は様々で、レクリエーション、景観、生き物の生息地、防災などに機能しているが、ニュータウン再生期を迎えるにおいて、緑のグランドビジョンとなる保全活用計画が必要である。

### 33. 「ランドスケープと自由」研究会（仮）

下村泰史（京都造形芸術大学）

凶悪な事件が次々に報じられ、見知らぬ他者への不安が社会を覆っている。公園に対する安心・安全への要求もこれまでになく高まっているようである。しかし、過度の安全・安心の希求が排除や差別に繋がることも懸念され、また「超監視社会」に対する警鐘も聞かれる。多様な出自と立場を持つ市民たちが生きる都市においては、そのコミュニケーションの場となりうる、公共空間は本質的に重要である。特に排除される側が社会に向けて表現を行うなら、公共空間においてしか、その可能性はないのである。この研究会では、「その場所を生きる側」の視点から、表現とコミュニケーションを軸に、公共空間のありようと可能性、その問題点について考えていきたい。

## 口頭発表

## 1. 都市軸からみる都市公園モン・デザールのデザイン原理

平岡直樹 (南九州大学環境造園学部)

ブリュッセルのモン・デザール公園を取り上げ、公園整備による都市軸の形成過程とその特徴、さらに都市軸形成に効果的な庭園技術について考察した。その結果、大平面を安定して見せるための傾斜角や、斜め上から見ることを想定した平面計画など、整形形式庭園の視覚補正の技術を積極的に適用していること、また公園上部の振り分け階段上の眺望テラスから庭園や街並みを俯瞰する構成は、庭園全体を高所から軸線上に眺望する整形形式庭園の基本的構成の都市空間へ応用であることがわかった。さらに都市軸について、本公園整備により形成され強調された軸線が、実際の道路整備を伴わない視覚上の軸性を形成する機能を果たしていることが明らかになった。

## 2. 囲繞景観調査における景観要素の抽出手法について

福井 亘 (西日本短期大学)

山本 聡 (兵庫県立大学)

囲繞景観の景観要素は、そこに生活する人が日常的に目にし、日常生活の延長上にあるもの、生活の中に溶け込んでいるもの、時代を経たものなど様々であり、景観要素を無意識に認識している場合が多い。そこで、囲繞景観の景観要素について、その抽出手法を検討し、モバイルGIS、GPSによる位置情報の取得を進め、GIS上でデータベース化を構築した。これらデータベース化した景観要素について、景観要素と道路や字界などに対しての直線距離解析を行った。その結果、道路から25m以内では、景観要素の約7割が存在し、また、全体の97%以上を100mまでの距離内に景観要素が存在する結果になった。これは、ほぼ視覚されやすい範囲に景観要素が集中して位置していたことから、囲繞景観の景観要素は、道路から視認の可能性が高いといった関連性が見出せた。

## 3. 中国青島市における歴史文化名城保護区の景観整備課題に関する基礎認識

陳 嵐・坂口真崇・岡本慎太郎・宮原敏樹

(九州大学大学院芸術工学府)

邵力民 (中国山東工芸美術学院)

包清博之 (九州大学大学院芸術工学研究院)

本研究は、中国青島市を対象地とした調査を行い、景観整備の課題を探求することを目的とした。2008年9月7日から11日までの5日間、青島市歴史文化名城保護区を対象に調査した。現地調査を通じて把握した印象を4つの認識スケール(眺望スケール、遠景スケール、街並みスケール、歩行者のスケール)に分類し、景観整備の課題への着眼を検討した。次に着眼した歩行者のスケール内において、道路と沿道および歴史的建造物の景観構成要素をその属性によって分類し、課題を考察した。これらを考察することで、本研究では歴史、文化、社会が異なる人々や造作物が混在する状況で生じる課題を基礎認識した。

## 4. 福岡市及び中国・青島市にみる都市景観と公共空間の利用特性の関わりに関する考察

邵力民 (中国山東工芸美術学院)

包清博之 (九州大学大学院芸術工学研究院)

中国・青島市と福岡市は、類似した景観特性を有するとともに、国際都市を目標としている。国際都市として発展するためには、観光客が訪問時に印象に残るような地域固有の都市景観を計画的に保全・形成することが課題の一つとなる。そのために、人々の居場所と景観を構成する要素の關係に着目する必要がある。本研究では、多くの人々が往来し、人々の離合集散の場所となる公共空間に着目し、そのあり方を両市の比較を通じて検討した。研究は、青島市と福岡市の景観特性と景観整備に関する制度についての基礎認識及び、両市の比較による景観整備上の課題を把握し、印象的な都市景観の保全・形成に寄与する公共空間のあり方について検討した。

## 5. 長崎県長崎市における神社の緑地環境の特徴と立地特性の解明

永山一樹 (長崎大学生産科学研究科)

渡辺貴史 (長崎大学環境科学部)

本研究は、長崎県長崎市の神社の緑地環境を対象に、その特徴と立地特性を明らかにした。主要な研究成果は次の通りである。(1)神社の緑地環境は、3指標(面積、緑被率、施設内容)から8つに分類された。(2)緑被率

が高い神社は山地・火山地に多く、低い神社は低地に多いように、立地する地形によって緑被率が異なっていた。(3)信仰に関わる施設のみ設置された神社は人口密度が低い地域に多く、信仰に関わらない施設も設置された神社は人口密度が高い地域に多いように、立地する地域の人口密度によって施設の内容が異なっていた。以上の成果をもとに、立地環境に配慮した神社の緑地環境の整備方針(緑被率の水準や活用の方角)について、検討した。

## 6. 福岡県の中山間地における地域森林資源の潜在量評価

松延康貴 (九州大学大学院芸術工学府)

重松敏則・朝廣和夫

(九州大学大学院芸術工学研究院)

地域に現存する資源を活用することは持続的な地域発展の上で重要である。本研究は福岡県八女郡黒木町笠原地区を対象とし、地区内の代表的な資源である森林の潜在量の把握及び評価を行うことを目的としている。まず、地区内の土地利用区分、樹幹直径階別森林分布を航空写真解析によって把握した。次いで現地調査に基づき林地におけるバイオマス資源量及び建材の産出量を算定した。その結果、対象地区内の80%以上を林地が占め、その9割がスギ・ヒノキ林であることが明らかとなった。また、その総現存量は約154万 $\text{m}^3$ であり、これは石油に換算すると約22万 $\text{kl}$ となる。

## 7. 商業地域の街路および沿道における緑の存在特性に関する調査・研究

宮原敏樹 (九州大学大学院芸術工学府)

包清博之 (九州大学大学院芸術工学研究院)

不特定多数の人々が、日常品の購買に加え、余暇の楽しみや非日常体験を求めて訪れる都市の商業地域では、来訪頻度や滞在時間の向上のため、来訪者に対して楽しみの機会を提供することが必要であり、そのための一つの手段として、街の緑が重要な役割を果たすが、商業地域の中で人々が目にするのできる緑は必ずしも多くない。楽しみの機会のために緑を提供することは、街路樹整備や都市公園・緑地の整備だけでは十分ではなく、商業活動を営む民間施設でも緑の配置が行われることが効果的である。本研究では、人々が商業地域で楽しい時間を過

ごすことに寄与する緑の存在特性を把握することを目的として、そのあり方を検討した。

## 8. 人々の離合集散の分布特性からみた商店街景観保全条件に関する基礎研究

通拉嘎 (九州大学芸術工学府)

包清博之 (九州大学大学院芸術工学研究院)

日本の商店街は古くから地域の人々の離合集散特性に従って発展し、地域景観の形成に重要な役割を果たしてきた。しかし、社会変化に伴って商店街を取り巻く人々の離合集散特性が変わり、商店街景観の形成条件は希薄になりつつある。そこで、本研究では、商店街景観の保全条件を把握することを目的とし、その周辺の人々の離合集散特性に関わる場の存在に着目した。福岡市を調査対象として明治時代から現代までの人々の離合集散となる場所を地図から抽出し、その分布特性と商店街との最短の徒歩距離の把握を通じて商店街景観保全条件を検討した。

## 9. 港湾景観の形成に資する都市住民の居場所に関する研究

豊崎修平 (九州大学芸術工学府)

包清博之 (九州大学大学院芸術工学研究院)

近代港湾は、港湾活動により形成される特有の景観を有しており、それらは地域固有の資源として、人々に享受することが求められるようになった。しかし、SOLAS条約等、安全・保安の面から人が港湾に近づき難い状況となっている。そこで本研究では、福岡市の博多港を対象とし、港湾景観を海と都市活動の接点として都市住民が容易に享受するための人の居場所の形成条件を把握することを目的とした。具体的には、博多港港域に36の調査単位を設定し、船舶、港湾物資などの港湾を特徴付ける景観要素の累積状況を、鉄道駅などの離合集散の場、商業施設などの生活行動の場の分布から海岸線への接近性を把握した。さらに、調査単位ごとに、展開写真の分析を加えることで、港湾景観を享受できる居場所の形成条件とその計画的課題が把握できた。分析にあたっては地形図、展開写真、港湾計画図等を用いた。

## 10. 神社等の立地特性からみた水郷地域の景観形成に関する基礎的研究

石田直也 (九州大学芸術工学府)

包清博之（九州大学大学院芸術工学研究院）  
 神社は、年中行事の場や、祭祀・祭礼空間として、古くから私たちの生活や文化に深くかかわってきた。神社の境内にある鎮守の森は、地域の財産であり、優れた地域景観を生み出すものとしても捉えられている。しかし、そのように地域住民が親しみ、訪れ、地域固有の景観に深く関わる神社の中にも、市街地開発に伴う道路の拡幅事業や区画整理事業等で敷地や参道を削られてしまう神社が存在する。そこで、本研究では神社が今後も地域景観の形成に寄与するための計画的示唆を得ることを目的として、神社が地域景観に寄与できる可能性が高い地域や、神社と周辺の地域資源との関係を明らかにし、検討した。

#### 11. 神社から読み解く河川空間の履歴

岡田章宏（清流文化研究所）

本研究は、時間・空間的な履歴を有しつつ現存している神社に着目し、立地条件に加え、創建時期、祭神の性格・故事来歴など地域との関わりなどについて総括的に考察し、河川景観の成り立ちを明らかにすることを目的に実施したものである。ケーススタディーとして大淀川・小丸川の下流域において調査した結果、時代の変遷とともに神社は洪積台地の山裾から沖積平野へ、下流から上流方向へと分布域が拡大する傾向が見られた。また、祭神の傾向には、時の支配者などの影響が色濃く反映していることが分かった。以上の結果から、神社の特性について総括的に考察することにより、マクロ的な河川空間の履歴を把握することが可能であることが示唆された。

#### 12. 識名園の景観に関する研究～大琉球の演出～

影本信明（国土交通省国土技術政策総合研究所）

稲元 豊（株式会社ブレック研究所）

琉球王家最大の別邸である識名園において、園内にある勸耕台からの眺望が大陸的な眺めを呈しているとされる要因について、現地調査及び3次元地図ソフトによるシミュレーション、既存知見等により考察を行った。その結果、勸耕台からの眺望が沖縄本島南部の広い範囲を見渡すことを明らかにするとともに、既存知見に照らして、視覚的には、勸耕台からの眺望におけるスカイラインのなだらかな形状

や位置（概ね俯角2°より遠方）、眺望の主対象に対する俯角の大きさ（10°以上）を主たる要因として抽出し、これらの地形的・視覚的要因と、識名園全体の空間構成等が相互に関連しあいながら、「大陸的な眺め」を印象付けていることが考察された。

#### 13. 中城村における歴史と自然を生かした地域づくりの計画提案

徳永 哲（エスティ環境設計研究所）

①那覇都市圏の周縁地域に位置する中城村では、土地利用や景観の急激な変化とコミュニティ意識の希薄化といった様々な問題が生じている。②世界遺産「中城城跡」の周辺地域でもある中城村北部においては、沖縄電力による火力発電所の立地を契機として、住環境の保全・創出と地域産業の活性化に資する新たなまちづくりに期待が寄せられている。③中城ならではの自然や歴史・文化を守り育てつつ、村民の誰もがいつまでも住みよいと思える生活環境を形成していくために、（1）自然・歴史環境の保全と活用、（2）豊かな緑と調和した土地利用の誘導、（3）世界遺産「中城城跡」にふさわしい文化的景観の保全、活用を提案した。

#### 14. 「“美ら島” 沖縄風景づくりのためのガイドライン」策定の意義と支援展開

安里直美・池田孝之（琉球大学）

玉城喜章・友寄孝・川崎祐子（社沖縄建設弘済会）

本稿は、内閣府沖縄総合事務局による「美ら島沖縄風景づくりのためのガイドライン」策定経緯における論点と、PIにみる市民意識の傾向の分析から、意義と課題を明らかにし、策定後の景観法に対応した風景づくりの支援展開について報告した。策定経緯での議論から風景づくりの視点として、自然環境や伝統文化、暮らし方の個性と多様性から、沖縄らしさを一括りにできないこと、地域が主役であることが共有された。また、沖縄らしさの表現を巡って、地域（シマ）ごとの特性、伝統的デザイン素材の扱いの是非、観光整備における生活景と自然との共生、ガイドラインの具体的な活用策など課題が提示されたことにより、その後の普及活動等地域への取り組みを報告した。

## 15. 盆上の美らのランドスケープデザインから見る 景観まちづくり—景観まちづくり教育の課題に関 する一考察—

平嶋 孝 (株大揮環境計画事務所)

本稿は、盆上の美らのランドスケープデザインから景観まちづくり教育の推進上の課題について一考察を加えることで、これからの地域づくりの課題を整理している。盆石・盆景は、余暇を活かして気軽に楽しむことができる縮景芸術であり、民衆芸術でもある。その面白みは、自然美の再現である。良好な景観まちづくりにおいても、盆山十徳、五徳三感の功用を応用すれば安住、安息、安泰のwell-beingが実現できる。今日の美らのランドスケープデザインは、規制と誘導の「である」まちづくりから生まれるのではなく、地域の人びとが自律して公共性の高い生活空間をとともに創り楽しむことが「できる」文化の中から生まれる。

## 16. ドッグランの利用実態にみる改善計画技術

関西剛康 (南九州大学環境造園学部)

鱒淵良人 (宇都宮市役所都市開発部)

本研究では、東京都立公園ドッグランの実態調査(対象地2箇所)を行った。調査項目は利用方法、飼い主の行動、犬の行動、トラブル、利用割合として、目視による利用行動の記録をとった。その実態調査を基にドッグランの利用現状、問題点等の分析を行い、分析結果を踏まえて利用者目線に立ち、ドッグランをより良い空間とするために今後のドッグランの施設について改善策を提示した。具合的な改善計画技術としては、多目的利用が可能な慣らしエリア、遊戯性のある丘、休憩用ベンチの有無、見学者用ベンチ、緑陰樹林等の設置・形成等を新たに提案した。

## 17. 校庭芝生化の普及に関する基礎的研究

西田益温 (西日本短期大学緑地環境学科)

鹿児島県・市と福岡市内の小・中学校の校庭芝生の実態調査を行い、校庭芝生の普及に関する問題点を明らかにし、その展開すべき方向性を考察した。校庭芝生化の効果として大きく期待されているのは、子供への精神的効果であることがわかった。一方、芝生化は「維持管理が大変」と思われている傾向が強いことが再確認できた。正確な知識と説得力

のあるデータが必要である。芝生化には小学校と地域の人々との交流が大切である。費用、機械等については、関係諸団体から支援を得ることも重要である。芝生化に関する諸問題のみならず、人的・社会的条件の解消がなされないとその実現、維持管理は難しいと考える。

## 18. 校庭芝生化事例報告～福岡市立百道浜小学校～

松本幸生・東島勉・前田准

(NPO法人グリーンシティ福岡)

後飯塚文敏 (福岡市立百道浜小学校校長)

関東、近畿圏などでは校庭の芝生化が進んでいるが、九州地域では立ち遅れている。しかしこの秋、福岡市の百道浜小学校で本格的モデルケースとして校庭芝生化が実現した。NPO法人グリーンシティ福岡では造園緑化のプロとして、計画段階からこのプロジェクトに参画し、支援活動を行ってきた。足掛け5年にわたる準備期間を経てようやく出来上がった芝生であるが、今後の維持管理には地域の財産としてこれを守っていく地元の力が重要であり、NPOとしては息の長い専門的フォローを続ける事が使命であると認識している。

## 19. パーゴラ仕立てのトケイソウの樹液流測定

竹内真一・鍋倉晴朗 (南九州大学環境造園学部)

植物による屋外生活環境の緩和を目的として、つる性植物をパーゴラに纏わせることにより緑陰を形成する手法が様々な造園空間で採用されている。しかしながら、比較的蒸散量の大きいつる性植物が量的に十分であるとは言えない状況にある。そこで、パーゴラに誘引したトケイソウの蒸散量を定量的に評価するために、ヒートパルス法により樹液流測定を行ない、切り木実験により吸水量を算定した。平成20年8—10月のトケイソウの蒸散量は0.22～2.87 ℓ/dayとなった。ヒートパルス法によりパーゴラに誘引したトケイソウの蒸散量を算定することが可能であるとともに、パーゴラの向きや構造が誘引される植物と密接な関係があることが示された。

## 20. 視感測色による生垣の色彩変化について

植田 緑 (南九州大学大学院)

都市景観づくりの一つに色彩構成を用いた景観条例や景観色彩ガイドラインは、建物の外壁に対して

の規定であることがほとんどである。しかし、景観づくりにおいては建物の色だけではなく植物の色も含めた全体的な色彩構成を行う必要がある。今回、宮崎で一般的に用いられている8樹種を1ヶ月間、カラーカードを用いた視感測色による調査を行い、日ごろ感覚的に捕らえている生垣の色をマンセル値で客観的に示し、樹種による特徴を5つのタイプに分類した。今後色彩構成の建物と植物の色彩調和を考える際の一つの指標となりうる可能性を示したものである。

## 21. 北稜高校造園科の取り組みと課題

羽山昌宏（熊本県立北稜高等学校）

北稜高校には、県内で唯一の造園科がある。造園科が育てた樹木を商業科が販売するなど他学科との連携により、総合高校ならではの活動を行っている。造園科は、幅広く活動をしており、今年初めての取り組みとして、ガーデニングショーに応募し設計・施工を行った。また、定員の確保をするために、地域や学校へのPR活動を積極的に行っている。個人住宅庭園の施工・管理、また公共工事の仕事は激減しており、生徒の進路にも著しい影響を与えている。我々の役割は、この厳しい社会を乗り越えていく人材の育成にある。“緑をとおして心と技を磨く”をモットーにこれからも職員一丸となり造園教育に取り組んでいかなければならない。

## 22. 農山村資源を活かした廃校活用プログラムに関する調査研究

原 愛子（九州大学大学院芸術工学府）

重松敏則（九州大学大学院芸術工学研究院）

農山村では過疎化の進行により廃校が増加しており、その有効な活用・運営案が模索されている。本研究では福岡県八女郡黒木町の廃校舎を対象に、交流活動の素材として地域資源に着目し、廃校を拠点とした交流活動プログラムの作成手法の検討を試みた。地域資源を意識的に捉える方法として、地元住民と地元外住民による地域資源調査ワークショップを開催した結果、地域の自然・文化的景観や生業、食・生活文化に関する地域資源と、少子高齢化による集落維持の不安といった地域の課題が明らかとなった。地域資源の効果的な組み合わせにより、こうした課題を解決するための取り組みを行うことが必

要との提案を行った。

## 23. 地域景観の保全に資する竹林の活用条件に関する考察

栗田 融（九州大学大学院芸術工学府）

包清博之（九州大学大学院芸術工学研究院）

本研究では、近年の竹林の拡大を地域景観資源の拡大として捉え、竹林の活用によって地域景観を計画的に保全するための基礎的条件を導くことを目的とした。全国有数の竹林を抱える大分県を研究対象地とし、竹林の地勢的立地側面（分布、地形、斜面方位、傾斜度、建物・集落からの距離、道路からの距離）を把握・検討することで活用条件を抽出した。その結果、活用を前提とした竹林と人との関わりの可能性に対して「活用容易」「活用可能」「活用困難」という条件が設定できた。さらに、大分県においては、活用が「容易」や「可能」な竹林が多くあることが明らかとなった。今後、竹林および竹材の地域ごとの活用方法を検討するうえで、有効な基礎的条件が導かれた。

## 24. 西表島の集落ならびに里山における竹林の分布とその利用に関する研究

藤井義久（九州大学ベンチャービジネ斯拉ボラトリー）

重松敏則（九州大学大学院芸術工学研究院）

久保田純平（九州大学芸術工学部）

近年、西日本を中心に管理放棄された竹林が拡大し問題となっているが、西表島においては、琉球王朝時代から続く伝統的集落で継承されてきた祭事に伴う慣習により、筍の採取を主とし、猪鬣の材料や竿として、今でもなお竹林が利用されると同時に維持管理がなされている。また、このような伝統的集落においても、一部の種類は過度の利用により分布が減りつつある。さらに、祭事と慣習が元々無い開拓で形成された新集落においては、この傾向がさらに顕著であり、島全体としては、全体的に竹林が減少傾向であると考察された。

## 25. 西表島におけるイタジイ二次林の遷移に関する研究

久保田純平（九州大学芸術工学部）

重松敏則・朝廣和夫

（九州大学大学院芸術工学研究院）

藤井義久（九州大学ベンチャービジネ斯拉ボラトリー）

梶原領太（九州大学大学院芸術工学府）

第二次世界大戦後、一時期開発が行われたものの、1972年より島のほぼ全域を国立公園に指定し自然保護を行ってきた西表島において、1971年時の伐採跡地に再生したイタジイ林の自然回復力とその特徴を把握すべく遷移状況の調査を行った。その結果、株立ちの幹を含む立木密度は遷移が進むにつれ減少する傾向が得られた。また、イタジイ林における植物の総出現種数は、伐採後の経過年数が短い二次林では多く、徐々に林冠が閉鎖されるにつれて減少し、自然林では再び増加する傾向が見られた。1971年時の伐採跡地には、現在イタジイが林冠を構成しつつあり、今後台風による遷移後退が顕著でなければ自然林に近づいていくと考えられる。

## 26. 都市近郊農地における余暇活動としての農作業の支援条件に関する基礎的研究

栗原なお（九州大学大学院芸術工学府）

包清博之（九州大学大学院芸術工学研究院）

都市近郊農地は、これまで農産物の生産の場と認識されてきたが、近年では人々の余暇活動の場としての機能も認められるようになってきた。しかしながら、そのような余暇活動を支援するための条件が十分整っておらず、必ずしも魅力的な活動となっていない。そこで本研究では、余暇活動としての農作業の魅力の向上に繋がる支援条件を把握・検討することを目的とした。具体的には、福岡市西区の農地において余暇活動として農作業をしている団体を研究対象とし、参加者へのアンケート調査を実施した。

## 27. 糸島における景観要素の存在特性からみた人々の環境体験の可能性の検討

岡本慎太郎（九州大学大学院芸術工学府）

包清博之（九州大学大学院芸術工学研究院）

福岡市中心市街地から西へ約15kmに位置する糸島半島は、海、山、集落、田園などの自然的要素に恵まれた場所であり、貴重な環境体験の場として保全・活用することが求められる。しかし近年、市街地開発の計画が進められるようになり、人々にとって良好な環境体験のための場所を保全・活用するための枠組みを計画的に導くことが課題となっている。そこで本研究では、新たに加わる要素と地域固

有の要素を関係づけることで、多くの市民にとって貴重な環境体験の場を保全するための地域類型の設定を目的とした。具体的には、糸島の骨格的景観特性の把握と回遊性の評価を通して、地域類型を設定するとともに環境体験の可能性について検討した。

## 28. 農村における住民の自然環境保全行動に関する研究—福岡県志摩町西貝塚地区を対象として

永野亜紀（九州大学大学院芸術工学府）

本研究では、福岡県志摩町西貝塚地区を研究対象地域とし、農業従事者および農地保有者の自然環境保全行動についてアンケートを基に分析をおこなった。総じて、地域に対する高い帰属性、愛着、地域貢献規範をもとに環境保全活動への意思・実態はみられるが、その活動は地域行事活動の範囲内で捉えられているようである。農業は、生物多様性、生態系保全、食の安全等とも連関する重要な生業であり、農地・水・環境保全向上対策の活動を、助成金が支給される期間だけの自然保全活動で終わらせないためにも、自然環境保全の重要性への意識が、リンクされた保全活動の必要性がある。そして、生物多様性に着目した環境支払いの理念と目的を明確にした活動として、農業と生き物との関係性を知る活動にまでその取り組みを高める必要性がある。

## 29. 旧立花家別邸『御花畠』について

佐々木千枝子・永松義博（南九州大学環境造園学部）

柳河城の西南隅、外堀に囲まれた地にはかつて大名の別邸があり、「御花畠」と呼ばれていた。立花家藩主鑑虎が元禄10年に築いた別荘「集景亭」がその始まりである。立花家に保存されている庭園の古絵図の描写から往時の庭園の様子が明らかになった。絵図の庭園には大池泉を中心に桜、楓、杉、椿、梅、柳、蘇鉄、桃などの花木や菖蒲などの色香の優れた植物が多数見受けられる。滝口からの落水は溪流となり、広大な池に注ぎ、堀割へと流れ出ている。庭園の改変は種々の記録からうかがえるが優雅な大名庭園として、藩主の趣味・娯楽・さらには休養のための場であったことが想像できる。

## 30. 柳川地方の歴史的庭園の現状と保全について

國分亮・佐々木千枝子・辻誠・永松義博・日高英二  
（南九州大学環境造園学部）

近年、生活環境の変化に伴い、郷土色豊かな庭園が消失し始めている。本研究は柳川市内に散在する歴史的庭園の保全に関する現況調査と所有者への意識調査を行った。結果は1982年の調査時と比べ、25年間に消失したり、改修された庭園は24庭園中、21庭園であった。主な理由は水質の悪化や水量減少や住宅地再開発などがあげられた。その他に住人の高齢化や不在により、荒廃している庭園も多くみられた。池泉式庭園において水量の不足は堀割環境を悪化させ、町並み景観を損ねることにもなる。水源となる堀割の保全と水量の確保が今後の課題であることが明らかになった。

### 31. 宮崎県西米良村における村おこしの成果

丸谷真理子（南九州大学環境造園学部）

衰退する地方の活性を図る取り組みとして、宮崎県西米良村の村おこし事業を調べた。1995年ごろからの同村の取り組みと観光客入込み数の推移の照合のほか、村民への意識調査を行ない、その成果について考察を行った。結果、1)日本で初めて行ったワーキングホリデー制度の導入が全国から注目を浴びるきっかけになったこと、2)しかし制度自体は観光客の集客力が小さく、温泉館の整備などハード面での対策が観光客の増加に貢献したこと、3)そして一部で観光客が増える一方でその効果を感じていない住民もおり、村全体での活性が今後の課題であることが分かった。

### 32. 短大生による地域参加型活動一還元活動を目指して一

塚越輝・免田拓也・福井亘・大石道義・岡本均  
（西日本短期大学緑地環境学科）

短期大学と地域とのつながりが希薄である本学の現状から、地域参加型の活動を通じて、地域還元することを目的とした。学生は、地域住民と意見交換をしながら、学生主体による各種イベント等を開催し、地域密着型の学校にすることを進めた。この活動を通じての結果は、社会に出るための経験、コミュニケーション能力の向上、各自のキャリアアップといったことである。地域還元を進めたことにより、地域住民との信頼関係も深まり、短大としての存在意義を示すこともできたことから、今後も継続して活動を行う必要性を感じた。今後の課題は、これら

の活動を継続することに加え、地域活動を充実させるため、今まで行ったイベント等の地域還元を、反省点についてフィードバックしながら、地域住民と共同で進めていくことが課題であることも明確になった。

### 33. 土壌環境がサクラ類の樹形に与える影響

日高英二・遠藤亮介・橋本晋卓・永松義博  
（南九州大学環境造園学部）

宮崎県高鍋町内の3ヶ所のサクラの植栽地で土壌条件と生育状態を調査した。土壌は透排水性と硬度の調査と状態の観察を行い、生育状態は樹高や直径などの形状を計測し、葉量の調査をした。その結果、固結や表層の乾燥などの劣悪な土壌状態では矮小化した単幹の個体が多く見られ、比較的土壌環境が良好な場所では幹が分岐する株立樹形になる個体が多かった。土壌条件に起因する生育状態で樹形に若干の差が見られ、特に樹冠形状にその傾向が強かった。

### 34. 小国町旧国鉄宮原線における自然遊歩道の計画提案～幸野川橋周回コース～

朝廣和夫・伊原久裕・牛尼剛聡・重松敏則・富松潔  
（九州大学大学院芸術工学研究院）  
高丘敦子・梶原領太・坪田広識・後藤萌・元松翠  
（九州大学大学院芸術工学府）

本研究は1984年に廃線となった熊本県小国町に所在する旧国鉄宮原線を対象とし、これまでの風景・森林等調査、グラフィックデザイン調査、そしてWEBデザイン調査の成果を統合し、自然遊歩道とサインの提案を行った。コースの選定は3コースを対象に地元でワークショップによる資源の抽出とアンケート調査を実施し、快適性の問いで約70%の被験者が快適と回答した鉄軌道跡地と水田、橋梁景観のある「幸野川橋周回コース」を選定した。サインは、表示板、QRコードを用いた携帯端末による情報提供、リーフレットのデザイン、小国産スギ材を用いた標柱のデザインを組み合わせで行った。